

雜 報

工藤君榮轉ス

工藤正四郎君ハ今回中島壽博士ノ後ヲ襲ツテ東京市衛生試験所技師ニ榮轉サレタ。

齋藤君出征ス

齋藤弘君ハ舊臘13日名譽ノ召集ヲ受ケ、勇ンテ出征サレタ。

學術集談會

12月22日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ、下記ノ様ニ學術集談會ガ開催サレタ。

演 題

1. 「ツベルクリン」注射ニヨル結核海猿ノ

體溫變化ニ就テ

{ 大林 容二
續木 正大

2. 抗酸性菌ノ乳酸脫水素反應

ニ就テ

井田 清

3. 抗酸性菌ノ糖質ニ對スル酸

生成反應ニ就テ

{ 佐藤 秀三
井田 清

4. 溶血性連鎖狀球菌ノ生物學

的研究

藤本 三郎

5. 瓦斯瘰癧豫防ニ關スル研究(續報)

{ 小田 通男
宮崎正之助
新井三九雄
松兼 正司
須藤 正

6. 日本馬流行性腦炎ノ病變ニ

關スル研究補遺。特ニ中樞

神經系統ニ於ケル某病變ト

傳質ニ因ル病變トノ比較竝

ニ不全型腦炎ノ存在ニ就テ

大久保 薫

7. 食品ノ化學的防腐ニ就テ

{ 遠山 祐三
鐵本 總吾
安川 隆

學友會へ寄附金

一金 26圓 74錢也

一金 16圓 56錢也

一金 30圓 39錢也

一金 16圓 28錢也

一金 19圓 24錢也

一金 9圓 07錢也

一金 87圓 80錢也

一金 19圓 80錢也

一金 65圓 59錢也

一金 41圓 09錢也

森下 哲夫君

桑島 謙夫君

中山 高志君

酒井 阜二君

小栗 一好君

岡本 啓君

矢追 秀武君

今村 荒男君

荒川 哲君

手塚 悅郎君

人事異動報告

發令 月日 辭 令 官職 氏名

12. 3 任東京帝國大學教授
金澤醫大附屬藥學專門部教授
敘高等官二等 從五勳六

淺野三千三

補傳染病研究所所員

東京帝國大學教授 淺野三千三

5 歸 朝

在外研究員 技手 高橋 義夫

12. 9 依願免本官 技手 工藤正四郎

12. 15 依願解囑 續木 正大

傳染病研究所業務ヲ囑託ス

龜田 幸雄

19 依願解囑 廣濟 法圓

12. 22 傳染病研究所業務ヲ囑託ス

日戶 修一

栗本珍彦論文正誤表

赤痢菌屬ノ分類ニ關スル知見補遺(實驗醫學雜誌第22卷第10號)

頁	行	誤	正																												
1773	上ヨリ 1	ニ至ツタ。(20)(21)(22)其ノ後	ニ至ツタ(20)(21)(22)。其ノ後																												
„	上ヨリ 17	Lentz u. Prigge	Lentz u. Prigge (30)																												
„	下ヨリ 8	Castellani (21)(28)	Castellani (27)(28)																												
1775	上ヨリ 10.11	.村上(33)ハ・關聯スルモノトナシ。	ヲ取消ス																												
„	下ヨリ 12	(假ニ京都株)ト名ヅク)	(假ニ京都株ト名ヅク)																												
1777	表中 「アラビノーゼ」欄	+ ^s	+ ^s																												
1779	下ヨリ 8	追 述	追 求																												
1780	下ヨリ 15	之レニ反シテ「イブシロン」菌 (京都株)	之レニ反シテ。イブシロン菌 (Koch)。イブシロン菌(京都株)																												
1782	下ヨリ 2	凝集原性ノ	凝集原性ヲ																												
1785	表中 駒込BⅢ 菌(第5號株)欄	800(-)	800(+)																												
1776	表 外	試験吸收	吸收試験																												
1794	第8表	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>免 疫 駒 込</td> <td>駒 込</td> <td></td> <td>駒 込</td> </tr> <tr> <td>血 清 BⅢ 菌</td> <td>BⅢ 菌</td> <td></td> <td>BⅢ 菌</td> </tr> <tr> <td>(第5號株)</td> <td>(第5號株)</td> <td></td> <td>(原株)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	免 疫 駒 込	駒 込		駒 込	血 清 BⅢ 菌	BⅢ 菌		BⅢ 菌	(第5號株)	(第5號株)		(原株)					<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>免 疫 駒 込</td> <td>駒 込</td> <td>駒 込</td> </tr> <tr> <td>血 清 BⅢ 菌</td> <td>BⅢ 菌</td> <td>BⅢ 菌</td> </tr> <tr> <td>(第5號株)</td> <td>(第5號株)</td> <td>(原株)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	免 疫 駒 込	駒 込	駒 込	血 清 BⅢ 菌	BⅢ 菌	BⅢ 菌	(第5號株)	(第5號株)	(原株)			
免 疫 駒 込	駒 込		駒 込																												
血 清 BⅢ 菌	BⅢ 菌		BⅢ 菌																												
(第5號株)	(第5號株)		(原株)																												
免 疫 駒 込	駒 込	駒 込																													
血 清 BⅢ 菌	BⅢ 菌	BⅢ 菌																													
(第5號株)	(第5號株)	(原株)																													
1796	上ヨリ 7	Mackenzie (64)(44)	Mackenzie (64)(74)																												
1800	上ヨリ 8	第1菌群ノ駒込	第1菌群ノ駒込BⅢ																												
„	上ヨリ 9	抗原因子ノヲ	抗原因子ノ																												
„	第16表	<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>駒込B菌(原株)</td> <td>中村菌</td> </tr> <tr> <td>駒込A菌</td> <td>(傳研株)</td> </tr> <tr> <td>(第1號株)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>川瀬菌(山本株)</td> <td></td> </tr> </table>	駒込B菌(原株)	中村菌	駒込A菌	(傳研株)	(第1號株)		川瀬菌(山本株)		<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>駒込B菌(原株)</td> <td>駒込A菌(第1號株)</td> </tr> <tr> <td>川瀬菌(山本株)</td> <td>中村菌(傳研株)</td> </tr> </table>	駒込B菌(原株)	駒込A菌(第1號株)	川瀬菌(山本株)	中村菌(傳研株)																
駒込B菌(原株)	中村菌																														
駒込A菌	(傳研株)																														
(第1號株)																															
川瀬菌(山本株)																															
駒込B菌(原株)	駒込A菌(第1號株)																														
川瀬菌(山本株)	中村菌(傳研株)																														
1803	下ヨリ 10	駒込B菌簇ガ菌群	駒込B菌簇ガ2菌群																												
1804	上ヨリ 14	(第	(第5																												
1807	下ヨリ 6	Schoolk	Schoolnick																												
1808	上ヨリ 5	Schoolk	Schoolnick																												
„	下ヨリ 8	・・變性シ來ル事ヲ報告シ遂ニ	・・變性シ。遂ニ																												
1809	上ヨリ 4	「A ₂ -因子」	「A ₁ -因子」																												
„	上ヨリ 15	共通「B-因子」	共通スル「B-因子」																												
„	上ヨリ 16	Putschko (62)	Rutschko (58)																												
„	下ヨリ 12	Koser u. Styron (64) (65)	Koser u. Styron (62)(63)																												
文獻	7) 9) 23)	Microory	Microorg																												
„	26)	Kempu	Kemp u.																												
„	54)	de Holl	deHoll																												
„	78)	Bacto.	Bact.																												

雜 報

加藤源三氏卒去

本所兼任技師加藤源三氏ハ 1月3日狭心症
ヲ急逝サレタ。

小川政敏君應召

小川政敏君ハ 1月18日名譽ノ應召ヲサレタ。

學術集談會

1月26日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ下記
ノ様ニ學術集談會ガ催サレタ。

演 題

- 「チャパネゴキブリ」(油蟲)ト食
中毒菌トノ關係(豫報) { 森下 哲夫君
八田 貞義君
- 肺炎雙球菌溶血毒素ニ就テ(第2報)
新井三九雄君
- 瓦斯瘰癧豫防ニ關スル實驗的研究
(第3報) { 小田 通男君
新井三九雄君
宮崎正之助君
松兼 正司君
須藤 正君
- 日本流行性腦炎患者ニ於ケル病
毒ノ排泄路ニ關スル研究—口腔
液・尿及ビ糞便内ノ病毒ノ證明
{ 三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡邊 漸君
- 昭和13年ニ於ケル日本流行性腦
炎病毒ノ不顯性感染及ビ血液殺
病毒素ノ季節的消長ニツイテ
{ 三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡邊 漸君
天神 智君
- 蚊ニ於ケル日本流行性腦炎病毒
ノ卵巢感染ニ關スル研究—人工
的感染蚊(C. pipiens var. pallens)
ノ卵及ビ第一期幼蟲並ビニ實驗
室内孵化非感染蚊(C. pipiens
var. pallens)成蟲内ノ病毒ノ證明
{ 三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡邊 漸君
天神 智君
關 應一君
長畑 一正君
徐慶 一郎君
清水 盈行君

7. 昭和13年ニ於ケル岡山市ノ蚊ノ
季節的消長並ビニソノ有毒性ニツイテ

}	三田村篤志郎君
	北岡 正見君
	渡邊 漸君
	細井 輝智君
	天神 應一君
	關 應一正君
	長畑 慶一郎君
	徐慶 水盈行君

8. 二十日鼠ノ偶發性腦脊髓炎ニ關
スル研究—殊ニソノ病毒ニツイテ

}	三田村篤志郎君
	北岡 正見君
	渡邊 漸君

9. 「カラアザール」ノ研究(報告並ニ綜説)

}	佐藤 秀三君
	藤下 哲夫君
	森井 輝彦君
	細井 田清君

學友會へ寄附金

- | | |
|--------------|---------|
| 一金 9圓 32錢也 | 大須賀 謙一君 |
| 一 .35圓 10錢也 | 進藤 宙二君 |
| 一 . 8圓 28錢也 | 須賀井 忠男君 |
| 一 .10圓 36錢也 | 宮本 正治君 |
| 一 . 10圓 57錢也 | 中 島 壽君 |

人事異動報告

- | 發令
月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|----------|-----------|-----------|-------|
| 12. 28 | 滿洲國へ出張ヲ命ス | 教授 | 小島 三郎 |
| 1. 3 | 兼任厚生技師 | 防疫官 | 加藤 源三 |
| | | 敘高等官二等 | |
| 1. 3 | 任厚生省防疫官 | 厚生技師兼傳研技師 | 加藤 源三 |
| | | 敘高等官三等 | |
| 1. 3 | 敘從四位 | 技師 | 加藤 源三 |
| 1. 3 | 卒 去 | 同 | 加藤 源三 |
| 1. 10 | 依願解囑 | | 澤田 利貞 |
| 1. 12 | 依願解囑 | | 鈴木 郡治 |

ツイテ研究報告シテ居ル。熱處置トシテハ電球ニヨル熱空氣室ノ中ニ、色々ナ時間動物ヲ置ク。食物ハ壞血病性ノ食餌ヲ與ヘル。一定ノ日時ノ後ニ剖檢ニ、附シ其ノ腎臟、脾臟、及ビ腦等ヲ Bessery and King ノ方法ヲ分析シテ居ル。結果トシテ熱處置セル動物ニハ、早クヨリ Vitamin C ノ減少ヲ見ル。人ニ就イテハ人爲熱處置前ト處置後ノ Vitamin C 排泄ノ研究ニヨリ、熱處置ガ Vitamin C ノ消耗ヲ増加セシメル事ハ明テアルト。(安倍)

大腸菌ニヨル泌尿器系疾患 Sulfamide
ニヨル治験例

Carl-g. Gessler et Albert Lippens
Emploi du sulfamide dans les
infections urinaires par coli
bacilles Presse méd. N°7.

1939 p. 127.

筆者等ハ本病ノ慢性ト急性ノ2群ニ分チ、38人ノ Sulfamide ニヨル治癒例ヲ報告シテ居ル。

慢性ノモノモ、急性ノモノニモ、本藥物ハ大腸菌尿路感染ニ甚大ナ效果ヲ有シテ居ル。之レハ Osgood ノ興味アル實驗結果ヲ確證スルモノデアアル。重炭酸曹達ヲ約 0.5 瓦ツツ毎同 Sulfamide ト共ニ投與シテ居ル。

之レハ本藥物ガ「アチドーゼ」ヲ起ス傾向ガアルカラデアアル。患者ハ尿中ノ藥物ノ濃度ガ低クナリスギル程飲料ヲトツテハナラヌ。投與ニヨリ何ラ危険ナ症状ヲ呈スル者ガ無カタトハ云ヘ。血液ヲ定期的ニ検査スベキダ。ソレハ危険ナル溶血性貧血ヤ顆粒狀白血球減少症ヲ豫知スル爲デアアル。(安倍)

雜 報

學術集談會

去ル2月24日(木)午後1時ヨリ講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ、演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 「アカイヘカ」ノ飼育 細井 輝彦君
2. 腸窒扶斯「ワクチン」精製痘苗混合液ノ人體接種ニ就テ
(特ニ反應) {廣瀬 茂君
鈴木餘四郎君
3. 腸窒扶斯「ワクチン」精製痘苗混合液接種ノ免疫效果ニ就テ(人體實驗) {廣瀬 茂君
鈴木餘四郎君
4. 精製痘苗、腸窒扶斯「ワクチン」ノ混合免疫ニ就テ 矢追 秀武君
5. 流行性腦炎「ウィールス」ノ in vitro 培養(ソノ1) 川喜田愛郎君
6. 日本流行性腦炎病毒トアメリカ馬腦脊髄炎(東部型及ビ西部型)病毒トノ比較研究
{三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡 邊 漸君
7. 東京在住老齡者、マニラ在住者及ビ臺灣産動物ノ血清ノ日本流行性腦炎病毒ニ對

スル殺病毒素ニ就テ {三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡 邊 漸君

學友會へ寄附

- | | |
|-----------------|--------|
| 1 金 27 圓 40 錢也 | 小田 通男君 |
| 1 金 118 圓 91 錢也 | 野上 隆君 |
| 1 金 11 圓 04 錢也 | 宮本 正治君 |

人事異動報告

發令 月日	辭 令	官職	氏 名
2. 6	依願免本官	技手	酒井 皐二
2. 16	任傳染病研究所技手		{ 蘆田 光三 矢部 正澄 福見 秀雄 廣濟 法四 川上立太郎
2. 16	傳染病研究所業務囑託		{ 蘆田 光三 矢部 正澄 福見 秀雄 川上立太郎
	ヲ解ク		
2. 17	傳染病研究所業務ヲ囑託ス	東大助教授	津田 恭介
2. 25	依願研究生退學ヲ許可ス		坂野 信雄
2. 20	中華民國へ出張ヲ命ス	{ 技手 佐藤 久藏 同 清水 文彦	

雜 報

學術集談會

去ル3月23日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ。演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 東京市内食物中毒患者ヨリ分離セル Salmonella ノ菌型ニ就テ 大橋 久治君
2. 「カラ・アザール」(黒熱病)ニ關スル研究(第2報) 實驗動物トシテノ縞栗鼠ニ就テ
 {石井信太郎君
 澤田 利貞君
 清水 重矢君
3. 微毒血清診斷ニ就テ 特ニ Wassermann 反應術式ノ選擇ニ關スル研究(第二回報告)
 {羽里彦左衛門君
 中村 茂一君
 田中 芳雄君
 清水 萬之助君
4. 「レウマチ」ニ就テ 三田村篤志郎君

學友會へ寄附

- | | |
|---------------|------------------------------------------------|
| 一金 14 圓 14 錢也 | 細谷 省吾君 |
| 一金 9 圓 24 錢也 | 細谷 省吾君 |
| 一金 60 圓 03 錢也 | 佐藤 久藏君 |
| 一金 16 圓 77 錢也 | {小田 通男君
新井三九雄君
宮崎正之助君
松兼 正司君
須藤 正君 |
| 一金 22 圓 39 錢也 | 西尾 憲三君 |
| 一金 14 圓 68 錢也 | 關屋 重徳君 |
| 一金 20 圓 34 錢也 | {木村 政長君
白 杵 仁君
佐々木英一君 |
| 一金 11 圓 11 錢也 | 宮本 正治君 |
| 一金 18 圓 97 錢也 | 佐藤 久藏君 |

- | | |
|---------------|--------|
| 一金131圓 20 錢也 | 矢田 與久君 |
| 一金 22 圓 48 錢也 | 眞鍋 清明君 |
| 一金 50 圓 15 錢也 | 吉水元三郎君 |
| 一金115圓 48 錢也 | 西尾 憲三君 |

人事異動報告

- | 發令
月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|----------|--------------|----|-------------------------------------------|
| 2. 28 | 依願解囑 | | 酒井 菊雄 |
| .. | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | 西尾 憲三 |
| 3. 8 | 研究生入學許可 | | 廣瀬 茂一 |
| 3. 15 | 任陸軍軍醫少尉 | | |
| | 見習醫官(技手) | | 神 干 謙 |
| 3. 18 | 兼任傳染病研究所技師 | | |
| | 叙高等官三等 | | |
| | 厚生技師兼内務技師 | | |
| | 傷兵保護院技師 | | 正五勲五 |
| | | | 南崎 雄七 |
| 3. 17 | 滿期退學 (應召中) | | 高野 正男 |
| 3. 20 | 任陸軍軍醫少尉 | | |
| | 衛生軍曹(囑託) | | 輕部彌生一 |
| .. | .. | | 森藤 靖夫 |
| 3. 25 | 中華民國へ出張ヲ命ス | | |
| | 技手 | | 細井 輝彦 |
| 3. 31 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | |
| | | | {大島 呈吉
上條 彰
高橋 秀雄
野上 鐵雄
石井 和夫 |
| 3. 31 | 依頼免本官 | | |
| | 技手 | | 補永 茂夫 |
| .. | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | | 補永 茂夫 |

「ワッセルマン」抗原吸着法ニヨリ避ケ得ラレル。モーツノ難關デアル所謂 Labilitätsreaktion 合併シ乍ラコノ吸着法ニヨツテ避ケルコトハ出來ナイ。

確認反應ハ 抗體ノ直接ノ證明ノ上ニ樹テラレナケレバナラス。コノ意味デ 吾々ハ次ノ如キ方法ヲ發表シタ。

1) Witebsky-Klingenstein-Kulm 抗原ノ「カオリン」吸着 0.5 ccノ W. K. K. 抗原ヲ磁製「シャーレ」上ニテ蒸發シ、ソレヲ 0.9% 食鹽水ニ混和、「カオリン」0.1 gヲ加ヘ強ク振盪、室溫 10 分後遠心沈澱、ソノ沈渣ヲトル。

2) 血清中 W. K. K. 抗體ノ W. K. K. 抗原「カオリン」ヘノ吸着、

上ノ沈渣ニ 1 ccノ血清ヲ加ヘ強ク振盪室溫 1 時間後氷室 8 時間放置、3000 回 20 分遠心沈澱シソノ沈渣。

3) W. K. K. 抗體ノ分離。

上ノ沈渣ヲ 0.9% 食鹽水 3 ccニテ二度洗ツタ後 0.9% 食鹽水 3 ccニ混和シ、59—60°Cノ水槽中ニ 30 分、ソノ後 Dewar ノ沈澱管ヲ用ヒ 30 60°Cニテ 3000 回分遠心沈澱スル。ソノ上清ニハ W. K. K. 抗體ノミヲ含ム。

コノ方法ニヨルトキハ Labilitätsreaktion ヲモ完全ニ避ケ、シカモ眞ニ結核ニ因ル場合ニハソノ分離抗體ノ W. K. K. 反應ハ常ニ陽性ヲ示シタ。(金子)

雜 報

五十嵐・森成兩君應召ス

醫局ノ五十嵐正治・森成禎二ノ兩君ハ名譽ノ召集ヲ受ケ、夫々 5 月 1 日及ビ 3 日ニ勇躍應召セラレタ。

學友會へ寄附金

- 一金 75 圓 28 錢也 島田捷四郎君
- „ 35 圓 47 錢也 土屋 三司君
- „ 55 圓 63 錢也 佐藤 秀三君

人事異動報告

(昭和 14, 5. 2 現在)

發令月日	辭令	官職	氏名
3. 31	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		間瀬 忠世
4. 7	依願傳染病研究所ニ於ケル血清學研究業務囑託ヲ解ク		田中 芳雄
4. 11	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		岩崎 龍郎
4. 14	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		諏訪 紀夫

伊藤 四郎
 村田 良介
 峰岸 重知
 松本 稔
 中村 道夫
 今野 龜之助
 山田 修造
 久津見 專一
 岩田 昌三
 木村 恭實
 富樫 三郎
 田中 太郎

4. 14	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		安井 廣
4. 14	任傷兵保護院調劑官敘高等官七等 藥劑手		毛利 勝利
4. 15	依願免本官 藥劑手		奥富 康雄
4. 17	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		奥富 康雄
4. 21	依願免本官 技手		井田 清
4. 24	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		松本虎太郎
4. 28	依願傳染病研究所業務ヲ囑託ヲ解ク		大島 呈吉
5. 1	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		片倉 仁子

雑 報

傳染病研究所創立四十一周年記念日ニ當リ

醫學界ヲ展望シテ所感ヲ述ブ

宮 川 米 次

一. 緒 言

本日茲ニ本所創立 41 週年ノ記念祝典ヲ舉グルニ當リマシテ、所懐ヲ述ベマスルコトハ、私ノ欣幸トスル所デアリマス。聖戰第 3 週年ニ當リマシテ、諸君ト共ニ、畏クモ 天皇陛下ノ萬歳ヲ壽ギ奉リ、皇軍ノ武運長久ヲ祈リ、併セテ本所ノ益々發展セン事ヲ庶幾フモノデアリマス。事變以來、本所員トシテ 5 月末日迄ニ應召セラレマシタ方が 37 名、現在應召中ノ方が 30 名、芽出度凱旋セラレタ方が 7 名デアリマシテ、今日迄ハ本所員トシテハ何レモ武運強ク、戰死、戰傷等ヲ蒙ツタ方モナク、多クハ第一線ニ御活躍ニナリ、目覺シイ勳功ヲ樹テラレテ居ラル、コトヲ承リマシテ、感謝感激ニ堪ヘナイト同時ニ、衷心ヨリ御健祥ナランコトヲ祈ル次第デアリマス。

戰爭ト文化

戰爭ハ破壊デアリ、建設デアルコトハ、古來ヨリ言ヒ觸ラサレタ言葉デアルガ、實際ソウユウモノデアラウカ否カラ、近代史ニヨツテ一瞥シテ見ヤウ。近世ニ於ケル大戰爭ハナント言ツテモ、Napoleon ノ偉業、歐洲大戰並ニ今次ノ日支事變ノ三ツノ右ニ出ルモノハアルマイ。Napoleon ノ革命戰ガ歐米ノ文化ニ如何ニ影響シタカラ見ルナラバ、其處ニ見逃スコトノ出來ナイ一大事實ガアル。ソレハ十八世紀ノ枯淡輕浮ノ思想ハ、一代ノ人心ヨリ飽カレテ終ツテ居タ際、眠ツテ居タ歐洲人ヲ太イ大キナ棍棒テ打チノメスカノ様ニ、風雲兒 Napoleon ガ一孤島ヨリ立ツテ、歐洲ノ天地ヲ震駭サセタ。思想上ニモ文學、美術、工藝ノ上ニモ影響シナイ譯ハナカツタデアル。斯クシテ所謂中古主義ノ復活ヲ見タノデアツタ。詩人トシテハ古今獨歩トサヘ言ハレテ居ル Victor Hugo ガ巴里ヨリ出タ。此外尙 Alfred Tennyson, Ivan Turgenev, Robert Browning, Albert Guy de Maupassant ガ出テ、畫家トシテハ Millet, Corot, Rousseau 等々ノ不世出ノ人士ガ輩出シテ居ル。戰爭ノ影響ノ如何ニ大ナルカト窺ハレル。然ルニ十九世紀ノ後半、大 Napoleon ノ歿後大戦ノ直接影響ニヨツテ、思想的ニ深刻味ノ強イモノガ多カツタノガ、物極マレバ必ズ變セザルヲ得ザルノ理ニヨリ又戰爭ニ對スル一種ノ恐怖ト嫌惡トノ氣分モ起ツテ來テ、自由主義、自然主義の色彩ノモノガ漸ク多クナツテ來タ。小説界ニ於ケル明星、佛ノ Emil Zola, 露ノ Tolstoy, Maxim Gorki. 詩ニ於ケル米ノ Walt Whitman. 劇ニ於ケル諾威ノ Henrik Ibsen. 音樂ニ於ケル獨ノ Richard Wagner. 彫刻ニ於ケル佛ノ Auguste Rodin 等々舉ゲ來ツタナラバ數限リナク居ル。然ルニ二十世紀ノ初メニ於テ是等自由主義ノ鼓吹ノ底流ニ言ヒ知レヌ獨裁的ノ氣運ガ醸成セ

ラレツ、各國ニ於ケル文化ハ燦然トシテ輝イテ來タ。特ニ注目スベキモノハ普佛戰爭ノ影響ニヨツテ Bismark ノ鐵ト血トノ政策ト臥薪嘗膽ノ苦トヲ以テ、勤勉之レ勤メタ獨逸ハ嶄然トシテ頭角ヲ現ハシ、終ニ英トノ勢力爭ヒハ所謂歐洲ノ大戰ヲ誘致シタノデアツタ。此大戰ノ結果「ラヂオ」ニ、飛行機ニ、其他多クノ驚クベキ兵器ノ發達ト共ニ、平和時ニ使用セラルベキ機械、器具等々科學ノ長足ノ進歩ヲ促シタコトハ縷々スベキ必要モナイ位デアル。吾日本モ日清、日露ノ役ハ通ツテ來タガ、ソレデモ尙歐洲大戰前迄ハ自然科學、人文科學ノ兩方面トモニ、殆ド總テ歐米依存ノ狀態デアツタコトハ否ムコトガ出來ナカツタガ、一朝歐洲ノ大事變ニ遭遇シテ茲ニ科學ノ獨立ヲ爲サルベカラザル運命ニ立チ至ツタノデアル。少クトモ吾ガ醫學ノ方面ニ於テハ一轉機ヲ與ヘラレ、歐洲大戰後ノ 20 年ノ今日ハ正ニ完全ニ獨立シタ醫學、即チ日本醫學ナルモノ、存在ヲ世界人ニ示スコトガ出來ル様ニナツタ事ハ慶賀ニ耐ヘナイ。之レ全ク戰爭ノ御蔭ト言ツテヨイト思フ。加フルニ今次ノ日支ノ事變ニヨツテ、獨伊等ノ防共協定國以外ハ舉ツテ、吾ガ日本ヲ故意ニ誤解センカノ如キ狀態ニ立ツテ居ル。科學的ニ日本ヲ封鎖セントスルノ形勢ガアリアリ見ラル、ノデアル。國家存亡ノ爲メニハ、又止ムヲ得ナイ自然ノ趨向デアラウ。各國民ハ自國民ノ腕ニ賴ルヨリ外、施スベキ術ハナイ。ソレガ出來ナイモノハ、氣ノ毒ナガラ他國ノ庇護ノ下ニ來ツテ、存立ヲ保タナケレバナラナイ。今次ノ聖戰ニ於テ皇軍ニ破竹ノ成果アルハ、全ク日本精神ノ發露ノ許ニ優秀ナル科學ノ力ガアルカラデアツテ、徒ラニ肉彈ノ強キニノミ賴ツテ居ルモノデハナイノデアルコトハ事新ラシク申ス迄モナイ。今ヤ大戰ノ半バニ達シタカノ感ガアルガ、來ルベキ新相手國ニ對シテハ、吾々ハ新ラシキ科學ノ力ヲ用ヒナケレバナラナイ。ソレガ爲メニハ今次ノ聖戰ニ於ケル尊キ經驗コソ、吾等ニ教フル事極メテ多クノモノガアル。之レヲ活用シテ、新研究指導ノ指針トナシ、新天地ヲ開拓シナケレバナラナイコトハ申ス迄モナイ。1、2ノ例ヲ申スナラバ、外科學界ニ於ケル尊キ多クノ經驗、傳染病學界ニ於ケル多種多樣ノ實驗成績、食品ト榮養トノ關係、氣候風土ト體力トノ關係、非常時ト平時ノ習慣ニ於ケル相關等々舉ゲ來ツタナラバ數限リナク澤山ニアル。吾等邦人ノ如ク主トシテ溫帶、亞熱帶地ニアルモノガ、一朝熱帶地、寒帶地ニ出動スルニ際シテノ準備等ニ對スル豫メ爲スベキ平素ノ訓練等ニ對シテモ、言ヒ知レヌ多クノ教訓ガアル。斯ク思ヒ來ルト戰爭ハ文化ノ開拓者デアルトサヘ思フノ念ガ一層痛切ニナリ聖戰ノ目的ヲ完全ニ達成スルノ日ノ早キヲ祈ルモノデアル。

歐洲ノ大戰ニヨツテ獨立シタ日本醫學ヲ、今次ノ事變ニヨツテ、廣ク東亞ニ普及サセ得ルコトノ實現ノ期ニ彌々到達シタノデアル。世界ニ誇示スベキ立派ナル醫學業績ヲ出スベキ時期トモナツテ來テ居ルノデアル。又世界人モ邦人ノ業績ニ敬意ヲ拂フ様ニモナツテ居ルノデアル。喜バシイ限リト申サネバナラナイ。吾ガ研究所ハ學問ノ蘊奧ヲ極ムベキ帝國大學ニ附置セラレ、命ズルニ醫學ノ研究ヲ以テセラレテ居ル。吾等一同ハ實ニ千歲一遇ノ好期ニ生ヲ享ケタノデアツテ、然カモ此立派ナル使命ノ許ニ勤クコトハ歡喜ト感謝トヲ致サナケレバナラナイ。私ハ茲ニ過去1ケ年間ノ本所ノ動靜ヲ述ベ、加フルニ世界醫學界ニ於ケル目覺シキ業績ト本所ノソレトヲ一言シテ比較シテ見タイト思フモノデアル。

二、昭和 13 年度ニ於ケル人事移動

昨年度ハ本所ノ事業ハ劃期的ニ多忙デアリマシテ、所員ノ數モ著ルシク増加シ一躍 600 有餘名トナツテ居ルノデアリマス。主任級ノ移動人事トシテハ、昨年 6 月内野豐生博士ガ長崎醫科大學ニ轉任セラレ、其後任トシテ同年 12 月淺野三千三博士ガ金澤ノ藥學專門學校ヨリ榮轉セラレ、

東京帝國大學教授トナリ、本所ノ化學部ヲ主宰セラレルコト、ナツタノデアアル。昨年3月退職セラレタ城井尙義博士ノ後任トシテ、奉天ノ獸疫研究所ヨリ山極三郎博士ガ同年11月榮轉セラレ、本所ハ同君ヲ迎フルニ新ラタニ獸疫研究室ヲ設ケタノデアリマス。本年1月加藤源三兼任技師ノ急逝ニヨツテ、南崎雄七博士ガ厚生省防疫課長トシテ、其後ヲ受ケテ、兼任技師トナラレマシタ。又本年3月東京市衛生課長酒井菊雄君ガ臺灣ニ轉任セラレ、其後任西尾憲三君ガ本所ノ囑託トナラレマシタ。其他ニモ多數ノ研究者ノ出遣入りガアリ、又中堅ノ青年達ガ應召セラレテ居ルガ、吾等ハ銃後ノ護リノ全キヲ期センガ爲メニ懸命ノ努力ヲ爲シ、研究ニ、作業ニ相當見ルベキ成績ヲ擧ゲテ居ルコトハ、全ク所員諸君ノ誠意ノ發露デアリ、努力ノ結晶デアルト信ジ、衷心ヨリ感謝スルト共ニ今後一層ノ緊張ヲ望ンテ止マナイノデアリマス。申ス迄モナク、日支事變ハ正ニ長期建設ノ期ニ遣入りマシタ、加フルニ歐洲ノ天地ハ風雲ノ極メテ急ナルモノガアリマス。何時吾等ハ鋒ヲ北ノ方ニ向ケナケレバナラナイコトニナルカモ知レマセヌ。誠ニ一大覺悟ガ必要ノ時期ニ遣入ツタノデアリマス。カ、ル重大時期ニ際會シマシタ吾々ハ責任ノ大ナルコトヲ感ズルト共ニ誠ニ幸福ナル時期ニ生ヲ亨ケタモノト言ハナケレバナリマセヌ。此感謝ノ念ト共ニ日常一物一事ヲ處スルニ當ツテ滿身ノ注意ヲ拂ヒ、聊カモ浮華輕佻デアツテハナリマセヌ。600ノ全所員ハ完全ニ打テ一丸トナリ、和心協調シテ本所ノ大使命ノ達成ニ邁進スルト共ニ銃後ノ護リノ全キヲ期セナケレバナラナイノデアリマス。本所ノ記念日ニ當リ、襟ヲ正シテ、過去ヲ顧ミ、行ク手ニ輝カシイ希望ヲ畫カネバナリマセヌ。

世界醫學研究ノ展望

私ハ手當リ次第ニ内外ノ醫學研究業績ヲ讀ンテ居リマス。申ス迄モナク本所ノ所員諸君ノ業績ニハ、渾身ノ注意ヲ拂ツテ以テ本所ガ研究ノ第一線ノ先頭ニ立チタイト念願シテ居ルノデアリマス。難解ノ事項ハ常ニ諸君ニ啓蒙シテ頂イテモ居ルノデアリマス。以下申シ上ゲマス數百ノ文献ハ斯クシテ得タモノデアリマスガ素ヨリ限ラレタル時間デ、其ノ多クハ専門外ノ事柄デアリマスカラ、妥當ヲ缺イタ判断ヲ爲シテ居ル點モ多カラウトハ思ヒマスガ、之レ全ク私自己ノ爲メデアリ、又研究ヲ生命トスル本所人ニトツテハ多少他山ノ石トスルニ足ル點デモアラウト信ジ、敢ヘテ此ノ機會ニ於テ、世界醫學界ヲ展望シ所感ヲ述ベル次第デアリマス。申シ上ゲマス事柄ノ一ツダケデモ血ト涙ノ結晶デアルト思ヒマスノニ、分秒ノ少時間ニ片付ケテシマウコトハ殘念デアリマスガ、幸ヒ諸君ニ原著ヲ再調シテ頂クコトモアラバ光榮トスルモノデアリマス。

三、興味アル細菌學の所見

「バチルス・ヴオラセウス」ノ人體感染例

Bacillus violaceus ハ Wooley (1905) ニヨルニ動物ニハ致死的感染ヲ起スガ人體ニハ非病原性デアルトイフ。本菌ノ最モ特有ナル點ハ紫色ノ色素ヲ作ルコトデアアル。爲メニ其名ヲ生ジタ。Black Shahn & Fla (J. Am. M. Ass. 110, 1938) ハ6歳ノ小兒ノ皮膚ニ本菌ノ感染セルヲ立證シタ。ソレハ雨後ノ溜リ水ニ浸ツタ爲メデアラウトイフ。2、3日後ニ高熱ヲ發シ、鼠蹊淋巴腺ノ腫脹ヲ來シ、皮膚ノ諸所ニ化膿竈ガ出來、其所ヨリ分離、培養シタノニ本菌ヲ證明シ、凝集反應ニヨツテ、640倍陽性デアツタ。アラユル検査ハ總テ陰性デアツタガ、病竈ニハ常ニ本菌ヲ見出シ、且ツ皮膚ニハ特有ナル紫色ノ色素ガ沈著シテ居タトイフ。氏等ハ本菌ヲ家兎ニ接種シタノニ、局所ニ激

ソレハ Sengen ノ液ニ家兎血清ヲ加ヘ、中性トナシ、「モルモット」ノ白血球ヲ一定數ニ入レ、之レニ癩結節ヲ加ヘルノデアアル。30度ノ許ニオクト癩菌ハ白血球内デ盛シナル増殖ヲ起スモノデアアル。然カモ此ノ培地ヲ特製ノ茄子形ノ「コルベン」ニ入レ其ノ全體ヲ昇汞水ヲ入レテ密封シ得ル硝子器ニ納メ、常ニ一定ノ濕度ヲ保ツテオクコトガヨイ。今日迄六代繼代スルコトガ出來タノミナラズ、此材料ニヨツテ動物ニ接種スルコトニモ成功シテ居ルトイフ。斯ノ如クシテ癩菌ノ動物實驗ニモ、培養ニモ成功シテ居ルコトハ、癩研究上、一大進歩ト言フノ外ハナイ。

「ヂフテリア」菌ニ關スル研究

(イ)「ヂフテリア」菌檢出ト Clauberg III 培地

本邦ニ於テハ、「ヂ」菌ノ檢出ニハ通常 Löffler ノ血清培地ガ利用セラレテ居ル事ハ、今モ昔ト變リハナイ。又實際、相當ニヨイ所見ヲ呈シテ居ルガ、獨逸ニ於テハ、此改良法ガ盛ニ行ハレ、Clauberg II, III, 等ノ培地ガ考案セラレテ、何レガ優秀ナルカニツイテハ甲論、乙駁ノ現狀デアアル。Clauberg II, Blutwasser-Glyzerolat-Tellur. Clauberg III, Tellur-Indikator-Nährplatte mit Wasserblau-Metachromgelb. デアル。Richter(C. f. Bac. 141, 1938)ハ此ノ比較所見ヲ發表シテ居ル。即チ 2866 ノ材料ニ於テ、Clauberg III デハ 10.5%陽性、Löffler デハ 7.57%陽性テ、遙カニ前者ガヨイ。加之ナラズ檢出スルノニ速カデアリ、且ツ過誤ヲ來ス惧レガ少イ。本培地ニ於テ菌陰性ノ時ニハ確カニ「ヂ」菌ノ陰性ナル事ヲ示ストイヒ、且ツ Löffler 培地ノ如ク口腔雜菌ノ増殖ニヨツテ、菌ガ陰性ニ終ハルコトハ殆ンドナイ。此點モ亦 Clauberg III ガ優レテ居ルトモ言フテ居ル。

(ロ)Clauberg ノ「ヂフテリア」菌型鑑別培地

氏(C. f. Bac. 142, 1938)ハ本菌ノ型ヲ容易ニ鑑別シ得ル培地ヲ考案シタ。馬鈴薯水、「チスチン」水、「ワツセル」青、「グリセリン」、3%寒天、PH 7.5 ヲ用ヒ 12—18 時間培養ニヨツテ下ノ如キ所見ヲ呈スルトイフ。即チ Gravis ハ著ルシク大キナ扁平粗糙ナ集落ヲ作り、邊緣ハ不正テ不透明ナ青色ヲ呈スル。Mitis ハ厚イ、粘稠性、灰白色ノ集落ヲ爲シ、時ニ多少青味ヲ帶ンテ居ルコトガアル。Intermedius ハ極ク小サナ無色ノ集落テ扁平デアリ、屢々「ルーペ」ヲ使用スル必要ノアル位小デアアル。之レニヨツテ培養的ニ型別ヲ爲スコトガ出來ルトイフノデアツテ興味アル方法ト思フ。

(ハ)「ヂフテリア」菌ノ人工的變異ト安定性

Gröh & Mégay(C. f. Bac. 143, 1938)ハ興味アル所見ヲ發表シテ居ル。ソレハ同誌 141 卷ノ Gröh ノ所見ヲ一層深ク追究シタモノデアアル。本菌ノ諸株(Gravis, intermedius, Mitis & Starke Toxinbildner)ヲ硫酸銅ヲ入レタ肉汁。又ハ寒天培地ニ入レテ、觀察シタ所見デアツテ、發育上相當顯著ナル影響ヲ蒙リ肉汁内ニアルモノハ膨大シ、或ハ球菌様ニモナル。之ニ反シテ寒天上ノモノハ細クナリ、短クナルコトガ特有デアアル。特ニ此ノ肉汁内ニ見ラル、球菌狀ノモノハ一見甚ダ奇異ノ様デアアルガ、非常ニ膨大シタ菌絲中ニ「メタクロマチツシユ」ニ見ユル顆粒狀ノモノト、何等カノ關係ガアルモノデアツテ、一個獨立ノモノトスルコトハ出來ナイ。是等ノ變化ハ硫酸銅ノ含有量ニヨツテ非常ニ相違ガアリ、0.01—0.005%等ニ於テ顯著ニ現ハレル。茲ニ注目スベキコトハ此種ノ變異變形ハアツテモ、動物ニ對スル毒性ニハ少シモ變リナイコトデ、如何ニモ安定性ヲ保持シテ居ルコトデアアル。

(ニ)球形「ヂフテリア」菌

シイ病竈ヲ作り、24時間デ動物ヲ斃シ、其局所竝ニ内臓、心血等ヨリ純培養狀ニ本菌ヲ得タトイフコトデアル。支那住民等ニハ此ノ種ノ皮膚炎ガアリハセヌカト思ハレル節ガアル。

「コクチデイオイドミコージス」Coccidioidmycosis

米國 California ノ特ニ San Joaquin Valley ニ特種ノ氣管枝性肺炎ニ引キ續キ結節性紅斑、マタハ多形性紅斑ヲ伴フ疾患ガアル。急突ニ發熱シ、咳嗽ヲ伴ヒ相當高イ發熱ガアル。診斷ニ種々ノ考慮ヲ拂フテ居ル内ニ解熱シ、上記ノ紅斑ガ先ヅ向脛ニ現ハレ、臀部、大腿、上膊等ニモ現ハレ多クハ何等ノ故障ナク治癒スルノデアル。其原因ハ多年不明デアツタガ、Dickson (J. Am. M. Ass. 111, 1938) ノ觀察ニヨルニ、氏ノ若イ助手ガ Fungus Coccidioides ノ長イ培養ノ蓋ヲトツタ時ニ、「ペトリー」ノ皿ヨリ煙狀ヲナシテ、孢子ガ飛散シ、之レヲ吸引シテ全ク上記ト同様ノ症狀ヲ喚起シ、其喀痰ヨリ上記ノ Fungus ガ出タトイフ。此ノ喀痰ヨリ得タ菌及ビ一般ニ此菌ヲ海狸ニ接種スルト、特有ナル肉芽腫、Coccidioidal granuloma ガ發生スルトモイフ。尙氏ハ皮膚反應ヲ診斷ニ應用シテ居ル。本邦ニ時々見ラルル此種ノ發疹性疾患ハ如何ナルモノデアラウカ。

癩菌ニ關スル研究

近時癩ニ關スル研究ハ相當盛ンニ行ハレテ居ル。特ニ本病ニ於テハ太田、高木兩教授ガ夫々獨立ノ方法ヲ以テ興味アル研究ヲ遂行シテ居ラレル。即チ太田君ハ鶏ヲ用ヒ高木君ハ「マウス」、家兎等ノ哺乳動物ヲ用ヒテ廣汎ナル實驗ヲ爲シ、何レモ人癩ノ結節ヲトリ、其移植ニ成功セラレタコトハ、特筆スベキコトト信ズル。本年ハ特ニ高木君ノ所見ニツイテ、聊カ記載シテ記録トシテ置キタイト思フ

高木教授ハ福島君ト共ニ多年ニ互ツテ癩ノ研究ヲ遂行セラレテ居ル。上記ノ如ク「マウス」、家兎等ニ人癩ノ結節ヲ材料トシテ、其移植ニ成功セラレタ。先ヅ「マウス」ニハ豫メ一定量ノ飯匙蛇毒ヲ注入シテチキ、之レニ人癩結節ノ夾雜菌ノナイモノヲ腹腔内ニ接種スルノデアル。斯クスルト、毒素ニヨツテ諸種ノ影響ヲ蒙ツタ「マウス」ノ腹膜、又ハ腹壁ニ特有ナル癩菌ノ結節ヲ生ズルノデ、之レニ要スル時間ハ大體 2—300 日デアル。此操作ニヨツテ屢々肝臓、脾臓等ニモ癩菌ニヨル結節ヲ生ズルガ、又注入材料ノ夾雜菌ノ有無ヲ知ル爲メニ、豫メ材料ヲ肉汁内ニ一晝夜オイテ見テ居ル。此ノ操作ニヨツテ五世代迄繼代シテ今日ニ至ツテ居ル。第二ノ動物實驗ハ家兎及ビ「マウス」ノ皮下ヲ利用シテ居ルノデアル。動物ノ背部ノ毛ヲ完全ニ剃リ落シ、之レニ布海苔ノ溶液ニ沃度加里、飯匙蛇毒、「コレステリン」、家兎血清ノ混合物ノ一定量ヲ皮下ニ注射シテ、其内ニ癩結節ノ材料ヲ插入スルノデアル。本菌ハ驚クベキ計リ盛ナル發育ヲナシ、約 3 週間ニシテ小指頭大位迄ニナリ、周圍ニ盛ナル病竈ガ廣マツテ行ツテ居ル像が見ラレルトイフ。尙興味アルコトハ、其局所又ハ他ノ部位等ニ一定量ノ大楓子油ヲ注入スルト、癩菌ハ盛ニ殺サレ、細胞ハ空胞形成ヲ爲シテ行クコトヲ認メ、治癒現象ガ行ハレルトイフ事デアル。斯ノ如クシテ、十二代迄接種繼代ニ成功シタトイフ、興味アル事實ト申シテヨイト思フ。同君ノ研究ニヨツテ培養ニモ成功セラレタ。

ソレハ Sengen ノ液ニ家兔血清ヲ加ヘ、中性トナシ、「モルモット」ノ白血球ヲ一定數ニ入レ、之レニ癩結節ヲ加ヘルノデアアル。30 度ノ許ニオクト癩菌ハ白血球内デ盛ナル増殖ヲ起スモノデアアル。然カモ此ノ培地ヲ特製ノ茄子形ノ「コルベン」ニ入レ其ノ全體ヲ昇汞水ヲ入レテ密封シ得ル硝子器ニ納メ、常ニ一定ノ濕度ヲ保ツテオクコトガヨイ。今日迄六代繼代スルコトガ出來タノミナラズ、此材料ニヨツテ動物ニ接種スルコトニモ成功シテ居ルトイフ。斯ノ如クシテ癩菌ノ動物實驗ニモ、培養ニモ成功シテ居ルコトハ、癩研究上、一大進歩ト言フノ外ハナイ。

「ヂフテリア」菌ニ關スル研究

(イ)「ヂフテリア」菌檢出ト Clauberg III 培地

本邦ニ於テハ、「ヂ」菌ノ檢出ニハ通常 Löffler ノ血清培地ガ利用セラレテ居ル事ハ、今モ昔ト變リハナイ。又實際、相當ニヨイ所見ヲ呈シテ居ルガ、獨逸ニ於テハ、此改良法ガ盛ニ行ハレ、Clauberg II, III, 等ノ培地ガ考案セラレテ、何レガ優秀ナルカニツイテハ甲論、乙駁ノ現状デアアル。Clauberg II, Blutwasser-Glyzerolat-Tellur. Clauberg III, Tellur-Indikator-Nährplatte mit Wasserblau-Metachromgelb. テアル。Richter(C. f. Bac. 141, 1938) ハ此ノ比較所見ヲ發表シテ居ル。即チ 2866 ノ材料ニ於テ、Clauberg III テハ 10.5% 陽性、Löffler テハ 7.57% 陽性テ、遙カニ前者ガヨイ。加之ナラズ檢出スルノニ速カデアリ、且ツ過誤ヲ來ス惧レガ少イ。本培地ニ於テ菌陰性ノ時ニハ確カニ「ヂ」菌ノ陰性ナル事ヲ示ストイヒ、且ツ Löffler 培地ノ如ク口腔雜菌ノ増殖ニヨツテ、菌ガ陰性ニ終ハルコトハ殆ンドナイ。此點モ亦 Clauberg III ガ優レテ居ルトモ言フテ居ル。

(ロ) Clauberg ノ「ヂフテリア」菌型鑑別培地

氏(C. f. Bac. 142, 1938) ハ本菌ノ型ヲ容易ニ鑑別シ得ル培地ヲ考案シタ。馬鈴薯水、「チスチン」水、「ワツセル」青、「グリセリン」、3% 寒天、PH 7.5 ヲ用ヒ 12—18 時間培養ニヨツテ下ノ如キ所見ヲ呈スルトイフ。即チ Gravis ハ著ルシク大キナ扁平粗糙ナ集落ヲ作り、邊緣ハ不正テ不透明ナ青色ヲ呈スル。Mitis ハ厚イ、粘稠性、灰白色ノ集落ヲ爲シ、時ニ多少青味ヲ帶ンテ居ルコトガアル。Intermedius ハ極ク小サナ無色ノ集落テ扁平デアリ、屢々「ルーベ」ヲ使用スル必要ノアル位小デアアル。之レニヨツテ培養的ニ型別ヲ爲スコトガ出來ルトイフノデアツテ興味アル方法ト思フ。

(ハ)「ヂフテリア」菌ノ人工的變異ト安定性

Gröh & Mégay(C. f. Bac. 143, 1938) ハ興味アル所見ヲ發表シテ居ル。ソレハ同誌 141 卷ノ Gröh ノ所見ヲ一層深く追究シタモノデアアル。本菌ノ諸株(Gravis, intermedius, Mitis & Starke Toxinbildner) ヲ硫酸銅ヲ入レタ肉汁、又ハ寒天培地ニ入レテ、觀察シタ所見デアツテ、發育上相當顯著ナル影響ヲ蒙リ肉汁内ニアルモノハ膨大シ、或ハ球菌様ニモナル。之ニ反シテ寒天上ノモノハ細クナリ、短クナルコトガ特有デアアル。特ニ此ノ肉汁内ニ見ラル、球菌狀ノモノハ一見甚ダ奇異ノ様デアアルガ、非常ニ膨大シタ菌絲中ニ「メタクロマチツシユ」ニ見ユル顆粒狀ノモノト、何等カノ關係ガアルモノデアツテ、一個獨立ノモノトスルコトハ出來ナイ。是等ノ變化ハ硫酸銅ノ含有量ニヨツテ非常ニ相違ガアリ、0.01—0.005% 等ニ於テ顯著ニ現ハレル。茲ニ注目スベキコトハ此種ノ變異變形ハアツテモ、動物ニ對スル毒性ニハ少シモ變リナイコトテ、如何ニモ安定性ヲ保持シテ居ルコトデアアル。

(ニ)球形「ヂフテリア」菌

「ヂフテリア」菌が特有ナル「コリネ」型ヲ呈スル外ニ球菌ヲ爲スコトガアルトイフコトハ Jordan, Pope & Pinfield 其他多クノ人ニヨツテ報告セラレ、硫酸銅ヲ培地ニ加フルコトニヨツテ比較的容易ニ變形スルコトモ別項ニ述ベタ通りデアアル。又本症者が恢復期ニ入ルト球形ニナルモノガ非常ニ多イコトモ注意セラレテ居ル。爲メニ普通ノ塗抹標本ニヨツテハ陰性ニ見ラル、場合ニ於テ、培養ヲ爲スト特有ナル「コリネ」型ノ本菌が見出サレルトイフノデアアル。然カモ此球形ノモノガ健康者ノ咽頭腔ニハ非常ニ多イトモ言ハレテ居ル。Polonyi(C. f. Bac. 141, 1938)ハ、本菌ノ24時間培養ノモノヲ久シキニ亙ツテ觀察スルト、終ニ球形ニ變態スルトイフコトヲ見出シ、2—3—5週間目、時ニハ9ヶ月目ニ完全ニ球形ニ變化シ終ツタトイフテ居ル。然シ此物ヲ Löffler 等ノ培地ニ移スト「コリネ」型ニ變ツテ來ルコトモ認め、且ツ氏ハ本病ノ感染ハ常ニ他ヨリ齧サレル菌ノミニヨラズシテ、自個體ニ有シテ居ル此種ノ菌ガ何等カノ原因ヲ發病ノ因ヲ爲スコトモ決シテ少クナイトイフテ居ル。此ノ事實ト、關屋重徳氏(實驗醫學雜誌21, 22, 昭和12, 3年)ノ所見トヲ綜合シテ見ルト極メテ興味ガアルト思フ。即チ「ヂフテリア」菌ノ極ク少量ヲ海狸ノ鞏丸又ハ角膜ニ作用シテモ發病シナイガ、葡萄狀球菌毒素ノ一定量ヲ同時ニ作用サセルト、茲ニ同一量ノ「ヂフテリア」菌ニヨツテ、定型的ニ發病スルトイフコトデアアル。即チ葡萄狀球菌ノ合併感染ガアリ、同時ニ作用シタ時ニ發病スルトイフノデアアル。之レト同一關係ハ恐ラク連鎖狀球菌、又ハ肺炎菌等ノ混合感染ニヨツテモ起リ得ルコトデアラウト思ハレル。實際「ヂフテリア」患者ノ咽頭ヨリハ、「ヂフテリア」菌ト同時ニ是等ノ菌ヲ見出スコトハ、非常ニ多イノデアアルコト等ヲ思ヒ合セルト、「ヂフテリア」菌以外ノ是等ノ菌ガ相當重大ナル役割ヲ演ジテ居ルノデハナイカト想像セラル、ノミナラズ、時ニハ是等ノ菌ニヨツテ何等カノ病變ガ先ヅ惹起セラレ、茲ニ存スル變形「ヂフテリア」菌等ガ威力ヲ現ハシ發病スルニ至ルトイフコトモ考ヘラル、コトデハナカラウカ、茲ニ Polonyi ノ Endogene Infektion ノ事實ヲ肯定シタイ様ニ思ハルノデアアル。

上記ノ研究ト、稍々類似シテ居ル所見ヲ Weiland Leinbrock(C. f. Bac. 141, 1938)ガ報告シテ居ル。ヤハリ本菌ノ Gravis, mitis, intermedius ノ非常ニ多クノ株ヲ用ヒテ、鹽酸、石炭酸、Trypaflavin, Targesin, Mucidan, Pyocyanase 等ニヨル殺菌作用ヲ檢シタ。即チ菌ノ抵抗力ニ關スル研究デアツテ、驚クベキ許リ抵抗力ノ強イ事ヲ見出シテ居ル。然カモ Gravis ガ mitis ヨリ一層強イ事ヲ知り、intermedius ハヤハリ、中間ニ存スルコトヲ見テ居ル。此ノ毒性ノ大小ガ抵抗力ノ強弱ニ關係ガアルトイフコトハ、實際、防疫上等ニ注意スベキコトデアアルコトハ申ス迄モナイト同時ニ、本菌ノ種々ノ特性ヲ研究スル場合ニハ必ズ各型ノ多クノ株ヲ用ヒテミナケレバ、一般的ノコトガ言ヒ得ナイコトモ是等ヨリ言ヒ得ル様ニ思ハレル。特ニ強イ毒素ヲ作ル型ノ如キハ可ナリノ特性ト思ハレルノデアアル。

(ホ)「ヂフテリア」菌ヨリ偽性「ヂフテリア」菌ヲ生ジ得ルヤ

Levinthal(Z. Hyg. 106, 1926)ノ研究ニヨツテ、眞性「ヂフテリア」菌ヲ、人工的操作ニヨツテ偽性菌ヲラシメ得ルトイフ所見ハ多クノ人々ニヨツテ研究セラレタ所デアツタ。別項ニ述ベタ通り、人工的ニ可ナリ變型ヲ爲シテモ其毒性ハ却々ニ變ラナイ特性ヲ有シテ居ルモノデアアルガ、Max Waldhecker(C. f. Bac. 142, 1938)ハ培地ニ色々ノ試薬ヲ加ヘテ、Levinthal ノ所見ヲ追試シタガ、却々所期ノ所見ヲ得ラレナカツタ。然ルニヤハリ氏ノ言ノ如ク家兔ノ血清ヲ加ヘテ培養スルト12本ノ中ヨリ2本ニ於テ、偽性菌ヲ發見スルコトガ出來、世代ヲ重ネテモ性狀ニ變化ハナカツタトイフテ居ル。興味アル事實デアツテ、果シテ眞ナリトセバ、眞性菌ヨリ偽性菌ガ出來ルトイフコトニナルノデアアル。健康者ノ咽頭等ニ見ラル、偽性菌ノ意義ニ特別ノ注意ヲ拂フ必

要ガアルコト、モナリ。追試シテ見ル價値ガアルト思フ。

(へ)「チフテリア」菌毒素ノ心臓障働作用

本菌ノ毒素ガ心臓其他筋、神經等ニ作用シ、急性心臓麻痺、又ハ筋麻痺ヲ起シテ屢々不幸ノ轉歸ヲトルコトハ周知ノコトデアルガ、其作用機轉ニツイテハ、充分ニ明ラカデナカツタノデ、相良貞直氏(實驗醫學、22、昭和13年)ハ別出セル藁及ビ海猿ノ心臓ヲ用ヒ、本菌毒素ノ粗製竝ニ精製セルモノヲ用ヒテ、精細ナル檢索ヲ爲シタル結果、迷走神經ニ抑制的障働性ニ作用スルコトヲ明カニシタ。爲メニ心筋「アウトホルモン」ヲ伍用スル時ニハ、本毒素ノ抑制作用ハ「アウトホルモン」ニヨツテ優越ニ影響セラレテ現ハレナイノミナラズ、「アウトホルモン」ニヨル鼓舞作用ガ明ラカニ現ハレルコトヲ見出シタルデアアル。此ノ所見ハ本毒素ノ心臓ニ對スル作用機轉ヲ明ラカニシタルノミナラズ、又臨牀上ニ於テ一度ビ本病ニヨツテ、心臓衰弱ノ徵アル場合ニハ、心臓「アウトホルモン」ヲ使用スルコトガ賢明ナル處置ノ一ツデアアルコトヲ示スモノト思ヒ興味ガ深い。

四、「ウイルス」ニ關スル研究

近時「ウイルス」ニ關スル研究ハ長足ノ進歩ヲ爲シテ居ル。特ニ米國ト本邦トニ於テ一層盛ナルノ觀ガアル。ソノ中デモ腦炎ノ研究ハ斷然頭角ヲ現ハシテ居テ、殆ンド總テノ動物ニ、夫々特有ナル腦炎「ウイルス」ガアルラシイコトモ知ラレタ。米國ニ於テハ、馬ニハ二種類ノモノガアルトサヘ言ハレテ居ル。本邦ニ於ケルソレトハ如何ナル關係ニアルモノデアラウカ。人類ニ於ケルモノハ相互ニ相違シテ居ルト言フ事デアアル。三田村教授等ノ蚊ニヨル媒介ハ略ボ一般ノ承認ヲ經タルヤニ思ハレル。特ニ馬ニ於ケルソレハ蚊ニヨツテ媒介セラレルト、米人ハ言フテ居ル。或種ノ腫瘍ハ「ウイルス」ニヨツテ惹起セラレルコトモ疑ヲ容レル餘地ガナイ様ニサヘ思ハレルニ至ツタ(此點ニツイテハ別項ニ聊カ記載スル積リデアアル)。人類ノ病原體トシテ、「ウイルス」ハ「リケチア」類ト共ニ極メテ重要ナルモノトナツテ來テ居テ、決シテ細菌類ノソレニ劣ルモノデハナイガ、今後特殊ノ考案ヲ案出シナケレバ、現在ノ方法ニヨツテノミデハ餘リ長足ノ進歩ハ見ラレナイ。此時ニ當ツテ、超弩級ノ顯微鏡ガ獨逸ニ報告セラレタ由ヲ昨年科學智識誌上ニヨツテ報ゼラレタ。ソノ他ニモ新タナル考案ガ近ク報ゼラルルデアラウト思フ。以下2、3ノ新知見ヲ摘録スル。

(イ)「トラコーマ」ノ病原體トシテノ Halberstädter- Prowazek 小體

本病ノ病原體ニ關シテハ極メテ多クノモノガ報告セラレ、近時本邦ニ於テハ學術振興會ノ特別委員會ニ於テ、本問題ガ取り上ゲラルルニ及ンデ、急ニ活氣ヲ呈シテ來テ、種々精細ナル注目スベキ報告ガアリ、Prowazek 小體ガ一種ノ生ケル微小體デアリ、病原性ヲ有スルトイフ事ガ略ボ確定ニ近イ様ニ迄思ハレルニ至ツタ事ハ、興味アル事ト申サネバナラナイ。特ニ此方面ニ於テハ石原忍教授ノ指導ニナル同教室ヨリノ業績ト田宮猛雄教授指導ニナル本小體ノ培養ニ關スル業績デアアル。石原教授ハ「トラコーマ」患者ノ結膜上皮細胞ノ内ニハ必ズ本小體ガ見出サレル。又此材料ヲ以テ感染セシメタ時ニモ必ズ出現スルコト、又本小體ノナイ材料ヲ以テ感染セシメタモノニモ出現

スルコト等々、注目スベキ所見ヲ發表シテ居ラレル。他方田宮、羽里博士等ハ結膜細胞ノ組織培養ヲ遂行セラレ、62例ノ材料ヨリ55例ノ雜菌混入ノナイ材料ヲ得ラレ、27例ニ於テ2—3日ノ培養ニヨツテ、本小體ノ盛シナル發育ヲシツ、アル状態ヲ認メテ居ラレル。著者モ常ニ其標本ヲ見ルコトガ出來、本小體ガ日ヲ遂フテ發育シツ、アル様ヲ見テ生物タルコトヲ疑フコトガ出來ナイ様ナ感ヲ有シテ居ル。然カモ此等ハ人體ニ接種シテ陽性ノ成績ヲ得ラレタトイフコトデモアル。然ルニ茲ニ1個ノ謎ハ何故ニ本小體ハ世代ヲ重ネテ培養シ得ラレナイデアラウカ、初代培養ニ於テハアレ程盛シナル發育アルモノガ、世代ヲ重ネ得ナイト言フ點ハ、本研究ニ於テ尙一步進ムコトヲ要スルノデハナイカト思ハレルコトデアル。ソレモ同氏等ノ熱心ナル努力ガ近く必ず酬ヒラルルコトト確信スルモノデアル。

然ルニ茲ニ注目スベキコトハ名古屋醫科大學ノ馬島鏡三博士ノ所說デアル。同氏ハ臨牀症狀ガ「トラコーマ」ト極メテ似通ツテ居ル包括性結膜炎 Lindner ノ Paratrachoma ニ於テ、常ニ Prowazek 小體が見出サレ、眞正ノ「トラコーマ」ニハ本小體ハ見出サレナイト言フコトデアル。眼科學的知識ノ乏シイ著者ニハ、馬島氏ノ所見ニ對シテ、自己ノ見解ヲ述ベルコトノ出來ナイコトヲ甚ダ遺憾トスルモノデアルガ、同氏ハ臨牀上眞ノ「トラコーマ」ハ慢性ノ肉芽性炎デアツテ、餘リ強イ炎症ハナイ。又「メヤニ」ハ澤山出ナイト言フテ居ラレルガ、包括性結膜炎ハ炎症強ク、且ツ傳染力モ強イ。「メヤニ」ニモ結膜細胞ニモ常ニ本小體が見出サレルガ、眞正「トラコーマ」ニハ、之レヲ見出スコトガ出來ナイ。爲メニ Prowazek 小體ハ包括性結膜炎ノ病原體ト言ヒ得ヤウガ、「トラコーマ」ノソレト言フニハ、兩病症ガ同一ナリト決定セラルル迄ハ、斷定シ難イト言フテ居ラルル。之レヲ茲ニ記シテ置キタイ。

(ロ) 第四性病ノ病原體

宮川小體ニ關スル新知見ハ、昨年度4ヶ所ニ於テ補遺セラレタ。其ノ一ハ獨逸 Hamburg ノ Nauk (Arch. Schiff. Trop. Hyg. Xli., 1937) & Malamos (C. f. Bact. 143, 1938) ノ報告デアツテ、角膜細胞ノ組織培養ニヨツテ、精細ナル追試ヲ爲シ、極メテ美麗ナル標本ヲ得ラレテ、宮川小體ヲ病原體ナリト斷言シテ居ルノデアル。其ノ二ハ、佛國巴里ノ Levaditi en Collaboration ノ所見デアツテ (Travaux Decembre 1937-1938) 廣汎ナル記載ヲ發表シテ居ル。氏ハ同國ニ於ケル此方面ノ最高權威デアツテ、組織培養竝ニ塗抹標本ニ於テ宮川小體ヲ檢出シ、ヤハリ病原體ト斷ジテ居ルノデアル。其ノ三ハ英國ノ此方面ノ權威 Findlay, Mackenzie & Mac Callum (Nature cxli, 1938) ノ所見デ宮川等ノソレヲ裏書シテ居ル。即チ病原體ノ大サ、染色上ノ特性、「マウス」腦ニ於ケル所見等全ク一致シテ居ル。是等ノ小體ノ外ニ稍々大ナルモノガアリ、ソレガ分裂シテ小體ガ出來ルトイフテモ居ル。要スルニ顆粒小體ヲ病原體ト斷言シテ居ルノデアル。其ノ四ハ本所ニ於ケル眞鍋清明氏 (實驗醫學雜誌, 22, 13年) ノソレデアル。同氏ハ「マウス」ノ胎兒ノ組織ヲ用ヒテ、組織培養ヲ爲シ、極メテ優秀ナル所見ヲ得テ居ル。ヤハリ眼ノ組織等ニ特ニ著ルシイ親和性ガ認メラレ、之レニ次グモノ

ハ辜丸、肺、腎、腦、胃、脾、心臟、皮膚、胸腺ノ順序デアツタ。一般ニ幼若ナル細胞程發育ガヨク、細胞内ニ於テ核ニ近ク先ヅ空胞状ニ小體ノ集團ガ現ハレル。弱擴大ニヨツテ是ヲ觀察スルト、時間ヲ追ツテ發育スル状態ヲ追及スルコトガ出來ル。通常48時間位ニナルト細胞ノ原形質ヲ充滿スルガ如クニ迄發育シ、之レヲ暗視野ニヨツテ見ル時ハ、小體ガ盛ナル運動ヲ營ム様ヲ活動寫眞ニヨツテ撮影スルコトガ出來ル位デアル。此運動ハ單ニ分子運動ノソレトノミ見做スコトガ出來ナイ。病原體ノ有スル固有運動デハナイカト思ハレルノデアル。斯クノ如ク發育シタ細胞ハ新生シタ幼若細胞デアツテ、培養組織ヲ弱擴大ニヨツテ見ル時ニ空胞ヲ有シ極メテ膨大シテ居ルカラ、一見シテソレト見別ケルコトガ出來ル位特有ナル像ヲ呈スルモノデ、極メテ壯觀デアル。斯クシテ細胞ハ破壊シテ、小體ハ細胞外ニ拋出セラルルノデアル。生体内ニ於テハ之レト同一現象ノ行ハルルコトハ申ス迄モナイノデ、之レニヨツテ細胞外ニ見ラレル小體ノ由來ヲ氏ノ培養方法ニヨリ鮮明ナラシメル事ガ出來タノデアル。之レヲNauk, Levaditi 等ノ所見ニ比較對照スルト確カニ一步進ンダモノト言フテヨイ様ニ思ハレルノデアル。

斯ノ如クシテ、第四性病ノ病原體タル宮川小體ハ内外ノ學者ニヨツテアラユル方面ヨリ證明セラレ、意義付ケラレツ、アルコトハ愉快ニ耐ヘナイノデアル。痘瘡ノ病原體ト言ハレル Paschen ノ小體モ組織培養法ニヨツテ、増殖ヲ認メルコトガ出來ルガ本小體ノ様ニ盛ナル増殖ハ見ラレナイ。近時特ニ本邦ニ於テ盛ナル研究ガ遂行セラレツ、アル「トラコーマ」ノ病原體タル Prowazek 小體モ、第一代ハ可ナリヨク發育増殖スルガ、第二代ニ於テハ、終ニ充分ナル所見ヲ得ラレナイト言フコトデアルコトハ別項ニ述べタ通りデアルガ、宮川小體ハ第二代ハ勿論、數十代ノ世代ヲ重ネテ培養シタ場合デモ、ヤハリ全く同様ノ所見ヲ呈スルコトガ、生活體トシテ最モ有力ナル證據ト言フテヨイト思ハレルノデアル。

(ハ)馬ノ腦炎「ウイルス」ト人類ノソレトノ異同

本邦ニ於テハ城井尙義博士等ガ馬ノ腦炎ニ關スル研究所見ヲ發表シテ居ル。自然ニ見ルソレト、人類ノソレトニ對スル關係ニツイテハ尙確定的所見ヲ發表セラレテ居ラナイガ、米國ニ於テハ、馬ノ腦炎「ウイルス」ガ人ニ感染シタトイフ例ヲ發表シテ居ル報告ガアル。Eklund & Blumstein (J. Am. M. Ass. 111, 1938) ハ馬ノ腦炎ノ流行地デアル Minnesota ニ於テ、6例ノ特有ナル人體ノ腦炎ヲ經驗シ、其ノ中ノ1人ノ血清ハ、Ten Broeck ニヨツテ、馬ノ腦炎「ウイルス」ヲ中和スル力ガアツタトイフ。又 Wesselhofft, Smith & Branch ハ昨年8月ニ Massachusetts & Rhode 島ニ於テ、馬ノ腦炎ノ流行ガアリ 200頭以上ノ馬ガ死ンダ。其當時蚊ノ非常ナル發生ガアリ、人間ニモ同病ノ流行ヲ見、7例ノ剖檢ヲ行ヒ、其腦ノ4例ニ於テ、馬腦炎「ウイルス」ヲ分離スルコトガ出來タトイフ。臨牀所見ニヨルニ子供ニハ急性ニ、成人ニハ稍々緩徐ニ始ツテ居ルガ、東部ノ馬腦炎「ウイルス」ハ一般ニ人ニ重症疾患ヲ起ストイフ。

(ニ)「インフルエンザ・ウイルス」ノ多原性

所謂流行性寒冒ト「インフルエンザ」ト同一ナリヤ否ヤハ1個ノ疑問デアル。又流寒ト所謂普通寒冒ト相違アリヤ否ヤモ考ヘテ見タイ事デアル。人類ノ「インフルエンザ」ト豚、駒、馬、牛等ニ見ル是等類似ノモノハ何レモ異ツタ病毒ヨリ惹起セラルルモノデアラウカ。昨年鶴見三三氏(東京醫事, 3105, 13年)ハ小笠原、高木氏ト共ニ朝鮮縞「リス」ニ感受性ヲ見出シ、小島三郎氏ハ、「フェレット」ヲ利用シテ、日本性ノ「インフルエンザ」株ヲ人間ヨリ分離シ得ラレタラシイ。獨逸ノ Köbe & Fertig (C. f. Bac. 141, 1938) ハ、本「ウイルス」ノ培養ヲ精細ニ研究シ、米、佛等ニ於ケル多クノ研究者ノ所見ニ追從シテ居ル。鶏胎兒ノ脈絡尿膜上ニ繼代培養ガ出來、然カモ局所ニハ輕度ノ浮腫ガ生ズルトイフ。駒ノソレハ駒ニノミ罹患性ガアリ、「マウス」ニ出來ナイコトハ人類ノソレト相違シテ居ル。然シ人類ノモ、駒ノモ、海獺ノ胎兒ノ肺臟組織ニヨツテハ培養ガ出來ナイト言フ様ナコトヲ發表シテ居ル。米國ニ於テハ既ニ免疫操作ヲ始メテ居ルトイフ報告ト比較シテ見ルト一層興味ガアル。

(ホ) 海燕ノ「ウイルス」病ト人類ノ「ウイルス」性肺炎 Virus-pneumonie.

Dänemark ニ屬スル Schottland ト Island トノ間ニアル大西洋ノ一小島 Färöern ニ、數年前ヨリ、高熱ヲ伴フ肺炎ノ流行ガアリ、常ニ8、9月頃ニ多イ。死亡率ハ20%ヲ算スルトイフノデ、同地ノ Rasmussen (Ugeskr. Laeg. (Iaes) 96, 1934, C. f. Bac. 143, 1938) ガ記載シテ居ルガ、昨年ニ至ツテ、獨逸ノ Koch Institut ノ Haagen & Mauer (C. f. Bac. 134, 1938) ガ可ナリ詳細ナル研究ヲ遂ゲ、海燕ニ本病ノ病原ガアリ、之レヲ捕獲、攝食ニヨツテ人類ガ侵サレルノデアルコトヲ明カニシタ。本病毒ノ鸚鵡ニモ鷗ニモ感染サレルコトガ出來ルダケデナクテ、「マウス」ニモ起病性ガアリ、腦内接種ニヨツテ、重症ヲ起スコトガ出來ルノミナラズ、腹膜接種ニヨル材料ニハ特殊ノ小體ヲ多數細胞内ニ見出スコトガ出來、人體ノ材料ヨリモ同一小體ヲ得タトイフ。之レガ Bedson et al (1930) ガ見出シタ鸚鵡病ノ小體ト如何ナル關係アリヤ、是非決定セラルベキモノデ、同一物カ近似種カデアラウト同時ニ海燕、鷗ニ此種ノ病氣ノアルコトハ注目スベキコトト信ズル。

(ヘ) 脊髓前角炎ノ豫防法

脊髓前角炎ノ病原體タル Virus ハ鼻腔ヨリ腦底ニ侵入スルモノト信ゼラルル實驗的所見ハ非常ニ多イ。然ラバ此鼻腔ニ何か特殊ノ化學藥品ヲ塗布スルコトニヨツテ、豫防的效果ヲ擧ゲ得ルヤ否ヤニ關シテ可ナリ研究セラレタモノデアツテ、1936年 Armstrong & Harrison ノ所見ニ相次イデ Sabin, Olitsky & Cox, Schultz & Gebhardt, Peet, Echols & Richter 等ノ報告ガアル。1%ノ硫酸亞鉛溶液ヲ嗅覺域ニ塗布スルト、猿ニ於テハ約1ヶ月間ハ本病毒ヲ鼻腔ニ送入シテモ、善ク感染ヲ防止サセルコトガ出來ルコトヲ認メテ居ル。1938年、Lee Skahinian, Bacher Mc Naught & Newell 等ハ之ヲ人體ニ應用シタ、嗅覺域ニ塗布スルノニハ、相當ノ技術ヲ要スルモノデアルトイッテ居ル。要スルニ鼻腔上氣道ニ塗布スルコトガ肝要デ、腦底ヘノ進路ヲ塞グノデアル。流行時ニ於テハ相當確實ナル方法デアルトイフ。使用量ハ10歳以

下ノ小兒ニハ0.2 cc. 10—14 歳ノモノハ0.4 cc. 成人ニハ0.25 cc. デ充分デアル。此種ノ方法ハ至極簡單デテリ。技術サヘ適當デアレバ。何等ノ害ハナイトイフコトデモアル。日本ニ見ラルル夏期腦炎ノ普通ノ感染。傳播經路ハ。三田村博士等ノ説ノ如ク蚊ノ媒介ニヨルトシテモ。實驗的ニハ比較的容易ニ鼻腔ヨリ感染サセルコトガ出來ルノデアルカラ。此種ノ藥劑ニ豫防力アリヤ否ヤハ檢シテ置キタイ事柄デアルト思フ。

(ト) 扁桃腺手術ト脊髓前角炎感染

米國ニ於テハ本症ガ驚クベキ計リ流行シテ居ルラシイ。又扁桃腺。「アデノイド」等ノ手術後ニ延髄症狀。延髄脊髄症狀ヲ呈スル本症ガ却々多ク現ハレルト報告セラレテ居ル。Ayer(1928), Aycock & Luther(1929), Silverman(1929), Fischer & Stillerman(1935-37)等ノ所見ガソレテ手術後7—10 數日間ニ發症スルトイフ。Sabin(J. Am. M. Ass. 111, 1938)ノ猿ニ於ケル實驗ニヨルニ扁桃腺。又ハ咽頭部注射ハ腹部ノ皮内。皮下ニ注入スルヨリモ遙カニ敏感ニ反應ヲ起シ。而モ延髄ノ症狀ガ顯著デアルトイフ。鼻腔内ニ注入シタ時トハ症狀ガ相違スル。此 Sabin ノ所見ハ丁度人類ニ於テ。扁桃腺。「アデノイド」等ヲ切除。剔出後等ニ現ハレル本症ト全ク同一症狀デアルトモ言フテ居ル。爲メニ。本症ノ流行時(夏。初秋?)ニハ此種ノ手術ハ注意スルガヨイトモイフテ居ルコトハ。興味アル事實デアルト共ニ。流行性腦炎等ニモ此種ノコトガアリヤ否ヤ。又實驗的感染ノ際。部位ニヨリ症狀ニ相違アリヤ知リタイ事ノ一ツデアル。又 Trask, Vignec & Paul 等(J. Am. M. Ass. 111, 1938)ハ本病毒ヲ糞便ヨリ分雜スルコトガ出來タトイフ。之レハ古ク25年前 Kling, Petterson & Wernstedt(1912). Harmon(1937)ノ所見ヲ立證シタモノデ。病者ガ恢復シテ後永ク便中ニ見ラレルトイフコトデアリ。此種ノ事實ガ流行性腦炎ニモ存スルコトデアラウカ?。

(チ) 「ウイルス」病トシテノ白血病

人類ニ見ル白血病ト鳥類。哺乳獸等ニ見ルソレト同一性狀ノモノノデアルカ否ヤハ。未解決ノ問題デアルガ。鳥獸類ニ於ケルソレハ其性狀ガ次第ニ明瞭ニナリツ。アルコトハ注目スベキコトデアルト思フ。

家鷄ニ見ル白血病ハ Caparini ノ發見以來内外ノ學者ニヨツテ可ナリ精細ニ檢索セラレ。Virusニヨツテ起ルモノデアリ。組織培養法ニヨツテ培養可能デアルコト迄知ラレ。脾臟。骨髓ノ培養ニヨツテ。骨髓母細胞ガ増殖シ。此接種ニヨツテ白血病ヲ起ス。此細胞ニハ骨髓性ト淋巴球性トガアルトイハレテ居ル。此種ノ白血病ヲ Leukaemie トイハズニ Leukose ト呼ビ。赤血球母細胞ノ増殖スラアルトイハレテ居ル。勝沼精藏氏等ノ發見セルモノハ正ニ之ニ屬スル。本病ノ Virus ト骨軟骨肉腫ヲ形成スル Virus トハ極メテ近似ノ性狀ノモノト言ハレテ居ル。

哺乳獸ニ於テハ Wilqus, Sprorul ガ大黒鼠。Mac Dowell, Richer ガ「マウス」ニ發見シ。移植可能デアリ。骨髓性ト淋巴球性ノモノトガアルトイヒ。Snijders, Gie ハ。海狸ニ淋巴球性ノモノヲ發見シタ。Furth ガ「マウス」ニ發見シタ骨髓性白血病ハ腹腔皮下ニ接種スルト骨髓腫(Myelom)ガ出來。靜脈内ニ注入スルト多發スルコトヨリ。其本態ハ腫瘍デアルトイフテ居ル。Storti モ略ボ之レト同様ノ所見ヲ得。白血病ト共ニ Myelose ヲ喚起サセル Virus ハ同一デアルトイフノデアル。

人工的ニ哺乳獸ニ實驗的ニ白血病ヲ喚起サセルコトガ出來タ。Lignae ハ大黒鼠ニ Benzol, Indol, Skatol ノ反復注射ニヨリ。Bernard ハ大黒鼠ニ石炭「タール」ニヨリ。Storti ハ白鼠ニ。Gaetani, Lanza ハ「マウス」ニ Benzpyren ヲ用ヒテ腫瘍發生ト共ニ白血病ト見做スベキモノヲ喚

起サセルコトが出来タ。健體ニ移植が出来血管内注射ニヨツテ、白血病ヲ起シ、皮下注射ニヨツテ腫瘍が形成セラレルトイフ興味アル所見ヲ報告シテ居ル。此種ノ事實が何程人體ノソレヲ解説スルニ利用シ得ラレルカハ、容易ニ斷言スルコトハ出来ナイガ、人體ニ見ル慢性骨髓性ノモノト、急性淋巴球性ノソレトガ、完全同一ノモノナリヤ否ヤハ疑ノ存スル所デアツテ、急性ノソレヲ見ル時ハ如何ニモ、何ニカ Virus ノ如キモノニヨツテ、喚起セラレテ居ル疾病デハナイカトノ感ヲ深フスルモノデアアル。

(リ) 結晶形「ウイルス」

或種ノ Virus ハ結晶形ニナスコトが出来ルトイフコトハ、煙草「モザイク」病ノ Virus ニツイテ Stanley(J. Bioch. 1936)以來言ハレテ居ルコトデアアル。Rowlins & Takahashi(Science 1938)ハ本病ニ罹ツテ居ル草ノ浸出液内ニハ、一種ノ二重屈折物質が含マレテ居リ、其濃度ト病毒ノ威力ノ強サトハ一致スルコトヲ知り、此物質ノ精製ヲ行フテ $20\mu \times 0.4\mu$ ノ可視性ノ結晶が得ラレ、蛋白反應ヲ呈シタトイフ。之ハ眞ノ結晶カ液狀結晶(Liquid crystalline state)ノ集合カ論議セラレテ居ルトイフノデアアル。

(ヌ) 「ウイルス」感染ト食養

又 Virus 感染ト食養的觀察ニ於テ Speucer(Stud. Rock. Inst. Med. Res. 1937)ハ磷酸鹽、加里鹽等ノ不足ガアルト早ク感染スルシ、過剰ノ方ガ豫防的效果ガアルトサヘ言フテ居ル。一方面ノ研究方法デアツテ、本邦ニ於テハ餘リ注意セラレテ居ラナイコトデアアル。

五. 「リケチア」ニ關スルー、ニノ所見

齧齒類ニヨル地方性發疹熱ノ傳播

Brigham & Dger(J. Am m. Ass, 110, 1938)ハ米國 'Alabamaニ於テ、市部ヨリ次第ニ地方ニ發疹熱ノ傳播ガアルコトヲ注意シ、ソレハ其地方ニ棲ム齧齒類ニ罪ガアルコトヲ知り、「モルモット」(Marmota monax monax,)野鼠、牧場鼠(Microtus pennsylvanicus pennsylvanicus)、家鼠(Mus musculus musculus)、白足鼠(Peromyscus leucopus noveboracensis)等ガ、本「リケチア」ニ感受性ノアルコトヲ認メタ。コレ等ノ中デ、此地方デハ「モルモット」ガ最モ意義ヲ有スルモノニ相違ナイ。其他ノモノハ餘リ見ラレナイカラト言フテ居ル。本邦ニ於テモ近時此種ノ發疹熱ノ報告ハ次第ニ多クナツテ來テ居ル。家鼠等ノ外ニ栗鼠等、其他ノ齧齒類ハ如何ナル關係ニアルモノニヤ、是非檢索シナクテハナラナイ事柄トナツタト同時ニ、豫防上ニモ亦其方ニ向ツテ行カナケレバナラナイト思フ。

Zwierz J(C. R. Soc. Biol. 1938)ハ流行地ノ野鼠ノ心血ニヨル Weil-Felix 反應ニヨツテ 16%陽性、稀薄地デハ 0.5%、無病地デハ全然之ヲ認メナカツタトイヒ、野鼠ガ病毒傳播ニ意義ガアルモノデアアルラシイトイフ報告モアル。

Zinsser, H. Weih & Fitzpatrick F, (Proc. Soc. Exper. Biol. & Med. XXXVII 1937) Rickettsia ノ培養ハ從來組織培養ニヨツテノミ成功シタノデアアルガ Zinsser 等ハ一新法ニヨツテ之ニ成功シタ。即チ 4%寒天水溶液ニ 50%馬血清ヲ加ヘ、2倍量ノ「タイロード」液ヲ注ギ PH ヲ 7.4—7.6 トナシテ斜面トスル。PH ヲ修正スルタメニ試験管ニハ「ゴム」栓ヲナシ中央ニ毛細管ヲ插入シテアル。病材ハ海狸莢膜ノ乳劑ヲ病

毒ニ浸シ上記ノ斜面ニ塗擦スルノデア。6日目頃カラ培養ガ始リ10日目頃ガ最高ニナルトイフ。一種ノ組織培養法ヲ發表シタ。

六、原蟲ニ關スル新知見

Leptospirosis grippo-typhosa aquatilis

本症ハ Epstein & Tarassow (Arch. Schiff. Trop. 33, 1929)ガ1928年ニ露國ニ於テ見出シ。夏秋ニ相當多ク農夫ニ流行スル「レプトスピローゼ」(Spir. Grippo-typhosa, dmitrovi)デア。ソレガ獨逸ノ Sculesien 地方ニ相當ニ澤山ニ流行シテ居ルコトガ知ラレ Schlammeieber, Erntefieber 等ト稱セラレ。Rimpsu, Schlossberger Kathe (C. f. Bact. 141, 1938)ガ詳細ニ研究シテ。血液ヨリ「レプリスピラ」ヲ檢出シ凝集反應竝ニ補體結合反應等ニヨツテ上記ノ露國ノ型ト同一デアコトヲ明ラカニシタ。本病ハ高熱ト重病感トヲ以テ始リ。胃腸症狀。關節痛。蛋白尿。脾腫等ガアルガ。ワイル氏病ト相違シテ黄疸ガ現レナイ。又海狸ニ對シテ起病性ガナイトイフコトデモアル。臨牀的記載ニヨルト。本邦ニアル七日熱等ト近似ノモノカ。或ハ同一物デアルヤモ知レナイト思ハレル。

黴毒ニ關スル研究

黴毒ニ關スル研究ハ種々ノ方面ヨリ遂行セラレテ居ルガ。特ニ注目スベキ2個ノ研究所見ヲ報告シタイ。ソレハ Pallidum ノ保存ト。異株ニ關スル研究トガソレデア。昨年記念日ニ報告シタ實驗的遺傳黴毒ニ關スル高木教授ノ研究ハ其後モ遂行セラレテ居ルガ。此種ノ所見ハ他ヨリハ報告セラレテハ居ナイ様ニ思ハレル。

Preponema pallidum & pertenuis ノ保存。此株ヲ保存スルニハ。通常動物ニ接種スル方法ガ。比較的確實トセラレ。培養シタモノニヨツテノ接種ハ却々ニ成功シナカソタノデアツタガ。高木教授ハ本邦株ニヨツテ之レニ成功セラレタノハ。一昨年ノコトデアツタ。又培養株ハ低溫ニ保ツテオイテモ。間モナク死滅シ。其威力ヲ失フコトガ。非常ナル缺點デアツタノデアツタ。然ルニ昨年紐育ノ Turner ハ組織ヲ思ヒ切ツテ低溫ニ保ツコトニヨツテ。其威力ノ衰ヘナイコトヲ見出シタ。ソレハ固體ノ二酸化炭素ト95%「エチールアルコール」ノ混合ニヨツテ得ル攝氏零下78度ノ低溫ニ保ツテオクコトデア。1ケ年間此内ニ組織ヲオイテ。「スピロヘータ」ノ形態、運動及ビ家兎ニ對スル病原性ハ少シモ衰ヘナイトイツテ居ル。然ルニ零下10—20度ニ保ツタノデハ2ヶ月以上ハ生キテハ居ラナイトイフコトデモアル。「インフルエンザ」。黃熱。腦炎等ノ病毒モ。此ノ零下78度ニ保ツテオクト。6ヶ月間ハ少シモ威力ニ相違ガナイト言フコトデア。氏ノ實驗ハ(黴毒。梅毒)。何レモ病原體ヲ保有スル組織片ヲ用ヒタモノデア。培養ヲ保存シ。其威力ヲ低下セシメナイ爲メニモ。此種ノ驚クベキ計リノ低溫ヲ利用スルコトガ恐ラク新所見ヲ齎スノデハナイカト思ハレルノデア。近時濾過性病原體ニ關スル研究ガ。各所ニ於テ非常ニ盛ニ遂行セラレ。其病毒ノ保存ハ何レモ苦心スル所デア。カカル際。Turner ノ研究所見ハ特ニ注意シテ見ル價値ガアルト信ズルト共ニ黴毒等ノ「スピロヘータ」ノ性狀ニ一知見ヲ加ヘタモノト言フ

テヨイト思フ (J. exp. Med. 67, 1938)。

Preponema pallidum ニ異種アリヤ否ヤノ問題ハ多年研究セラレ想像セラレ。野口氏ノ如キハ、其存在ヲ可ナリ肯定セラレタカニサヘ思ハレタ所見ヲ報告シテ居ラレル。又東洋ト西洋ノ梅毒ハ臨牀的ニ種々ノ特徴ガ注目セラレテ居ル。邦人ガ、西洋株ニ侵カサレルト、其症狀ガ激烈デアルトイヒ。又橋本教授ハ重感染ヲ行フテ相當特徴アルヤニ言ハレテ居ル。東洋人ニ見ル梅毒ハ第二期症狀ガ激烈デアルノニ麻痺狂、脊髓癆ガ比較的少イ。其他一般ニ神經梅毒ガ少イトサヘ言ハレテ居ル。此外古クハ Levaditi ノ動物實驗、Gozony, Neisser 等ノ所見モアルガ、Pearce (J. Exp. Med. 67, 1938) ハ此問題ヲ取り上ゲテ、新ラタナル實驗的考察ヲ爲シテ居ル。其方法ハ家兎ニ於ケル動物實驗上ニ於ケル所見ヲ土臺トシタモノデアツテ、Pallidum ニ異種ガアルト迄ハ言フテハ居ラヌガ、米國株ト支那株トニ於テハ臨牀上ニ相當特徴アルコトヲ認メテ居ル。其行キ方ガ普通ト可ナリ相違シ、如何ニモ米國流ノ研究ノ仕振りデ、大ガカリナ點等モ注目スベキコトダト思フ。北京ニ於テ得タ2株ハ米國ニ於ケル既知ノ Nichols & Zinsser-Hopkins トヲ用ヒ、此ノ4系ヲ同時ニ夫々米國、支那ニ送附シテ同時ニ實驗ヲ爲シテ、其所見ヲ比較シテ居ルコトデアル。Rockefeller 研究所ト北京協和醫學校トニ於ケル氣候、風土ノ影響ヲ考慮シタ爲メデアラウ。又病毒ヲ遠ク輸送スルコトニヨル影響モ考慮ヲ拂ツタ爲メデアルコトハ申ス迄モナイ。此種ノ實驗方法ハ何處デモ、又誰ニデモ行ヒ得ルトイフ事柄デハナイ、而モ實驗的梅毒ハ夏期ニ却々ニヨイ成績ヲ得ラレナイデ春ガ最モ強ク現ハレルコトハ周知ノ事デアツテ、氣溫、風土ニ却々ニ關係ガアルカラ、此種ノ研究方法ハ出來ルコトナラ、實施シテ見タイ事柄デアル。斯クシテ得タ家兎ニ於ケル梅毒性疾患ハ、全ク同一ノモノデハナカツタ (not wholly identical) ト言フテ居ル。其ノ要點ヲ言フト、支那系ハ眼ヲ好ンデ侵カス性狀ガアリ米國系デハ2.8%位ノモノガ、支那系デハ5.3—6.5%ニ見ラレタトイフ。次ギニ支那系ハ潜伏期ガ稍々短ク6—10日間早く睪丸炎ガ發現シタト。次イデ一般的症狀ガ自然ニ消褪、治癒スル傾向モ、支那系ノ方ニ顯著デアツタ等々ノ事ヲ記載シ、結論シテ言フニ、梅毒性疾患ノ反應ガ非常ニ多種多様ノ様式ヲ以テ發現スル事ヲ考慮ノ中ニ入レル時ニハ、上記ノ臨牀上ノ相違ヲ各系ノ先天性ノ性狀又ハ生物學的特性ニ歸スルコトハ出來ナイ様ニ思ハレルト爲シテ居ル。兎ニ角、近來此方面ニ於ケル注目スベキ實驗方法デアリ、且ツ所見デアツテ、此種ノ檢索ノ益々加ヘラレンコトヲ切望スルモノデアル。近時本邦ニ於テハ性病ニ關スル事項ハ國民衛生上焦眉ノ急デアリ、各種ノ研究ヲ深く遂行スル必要ガアルト信ズル。

「マラリア」原蟲感染ト免疫

Coggeshall L. T. & Kumm H. W. K (J. Exp. Med. 66, 1937) ハ Plasmodium knowlesi ニ慢性罹患シテ居ル猿ノ血清ハ健康猿ニ注入スルト同種ノ寄生蟲ニヨル致死の感染ヲ防禦スルコトガ出來ルコトヲ發見シ、特殊ノ免疫體ノ構成ガアルトイフテ居ル。然カモ同氏等ハ1938年(同誌68)ニ於テ、既ニ慢性ニ罹患シテ居ル動物ニ重感

染ヲサセルト、免疫體ノ產生ガ一層増殖スルコトヲ見出シタ。ソレニハ適當量ノ寄生蟲ヲ相當多數ニ注入スル方ガヨイガ、然シ餘リニ強度ニ過ギルト、却ツテ、不良ニナルコトモ明カニナツタ。即チ動物ニ衰弱ヲ起ス程ニ感染サセルノハ、却ツテヨクナイトイフ所見ヲ發表シテ居ルコトハ興味ガ深イ。人體ニ於ケル *Plasmodium vivax* ニ於テモ、再感染ハ却々ニ困難ナルモノデアアル。初感染後 10 數年ニ於テモ認メラルル事實デアアル(麻痺狂ノ治療等ニ於ケル著者ノ經驗)。之ハ免疫體ガ現存シテ居ルノデハナクテ、「チフス」等ニ於ケル様ナ組織免疫ガ發生シテ居ル爲メデアラウト思ハレル。之レト同時ニ現在 *Plasmodium* ヲ保有シテ居ルモノニ、重感染ヲサセルト、免疫體ガ一層多ク出來ルトイフコトハ細菌性疾患ノソレト比較シテ興味ノアル事柄ト言フテヨイ。

「マラリア」原蟲ノ内被細胞内ニ於ケル發育

人、猿、鳥類等ニハ夫々數種ノ「マラリア」原蟲ノ寄生スルコトハ周知ノ事デアリ、其ノ發育ハ中間宿主内ニ於ケルモノヲ別トシテ、終宿主内デハ赤血球内ニ於テスルモノト考ヘラレ且ツソノ所見ハ正シイガ、近時ノ研究ニヨツテ、内被細胞内ニ於テ特殊ノ發育ノアルコトガ知ラレタ。Kikuth & Mudrow (C. f. Bac. 142, 1938) ハ「カナリア」ノ *Plasmodium cathemerium*, Schwetz (Trans. Roy. Soc. Trop. Med. 31, 1938) ハ猿ノ *P. knowlesi* (?), Raffoele (Riv. di mal. 17, 1938) ハ人ノ *P. vivax* 等ニ於テ骨髓(胸骨)、其他ノ内臓ノ内被細胞ノミナラズ、單核細胞、「プラスマ」細胞等ノ内デモ特殊ノ發育ヲ追蹤スルコトガ出來ルトイフテ居ル。然カモ特有トスベキコトハ、此原蟲ハ色素ヲ保有シテ居ラナイコトデアツテ、明ラカニ「シゾゴニー」ノ現象ヲ認メルコトガ出來ルトイフ。此種ノ所見ハ慢性「マラリア」ニ於テハ常ニ存在スルコトデハナカラウト思ハレル。彼ノ特殊ノ脾腫ノ如キニツイテ、精細ニ追究シテ見ルベキ事柄ト信ズル。

「マラリア」ノ潜伏期ノ驚クベク長イモノ

Brachtel (D. M. W. 1938) ハ「マラリア」ノ發病ニハ驚クベキ計リ永イ潜伏期ノアルモノ、アルコトノ經驗ヲ發表シテ居ル。3 日熱ハ通常 10—15 日、4 日熱ハ 10—20 日、熱帶熱ハ 5—10 日ノ潜伏期ト言ハレテ居ルノニ、7 ヶ月(1 例)、1 年間(2 例)ノ潜伏期ノアルモノヲ報告シテ居ル。何レモ 3 日熱型デアツタトイフ注意スベキ所見デアアル。

七. 腫瘍ニ關スル研究

粘液腫病毒ノ培養

Hoffstadt & Pilcher (J. Bac. 1938) ハ粘液腫ノ「ウイルス」ヲ孵化鶏卵ノ脈絡尿膜上ニ培養可能ナルコトヲ報告シテ居ル。而モ 132 日間、33 代ノ繼代ニヨツテ、移植可能デアアルカラ、脈絡尿膜上ニ本「ウイルス」ガ増殖シタコトハ確實デアルト言ツテ居ル。興味アル事實ト申シテヨイ。獨ノ Haagen & Dschen-Hsing (C. f. Bac. 143, 1938) モ略ボ同様ノ所見ヲ得。Aragas (1924) ガ記載シタ 160—180 $m\mu$ ノ小體ヲ多數ニ發見スルコトガ出來種々ノ染色法ト附圖トヲ載セ、病原體ト斷言ハシテ居ラヌガ、可成リ注

目シ。又強イ免疫ノ發生スル事實モ認メテ居ル。Shopeノ發見シタ纖維腫内ノソレト思ヒ合セル時ニ。此種ノ腫瘍ガ「ウイルス」ノ作用下ニ發生スルコトハ何等疑ハナイコトノ様ニサヘ思ハレル。勿論此種ノ「ウイルス」ガ。腫瘍發生ニ對スル唯一無二ノ「アゲンス」トイフノデハナイケレドモ。少クモ「ウイルス」ノ作用ガ。一有力ナル意義ヲ有スルト言ツテモヨイデハナイカトサヘ考ヘラレルノデア。茲ニ尙注目スベキコトハ本「ウイルス」ヲ孵化鶏卵ノ脈絡尿膜ニ接種シタ際ニ其病變ノ大小ハ。接種病毒ノ大小。接種前後ニ於ケル鶏卵ノ冷却度。孵卵溫度等ニ關係ガアル事等ハ如何ニモ。生ケル病毒ノ活力ノ如何ニ關係ヲ有スルカガ窺ハレル事實ト申サネバナラナイ。此際増殖スル細胞ハ主トシテ外胚葉ノ細胞デア。内。外。中胚葉ノ増殖細胞原形質内ニ「ギームザ」ニヨツテ紅色ヲ呈スル顆粒狀ノ封入體が見ラルルト云フ事デアリ。ソレハ接種家兔ノ腫瘍細胞内ニ見ラル、モノト類似シテ居ルトイフ。

Van Roogen & Rhodes (C. f. Bac. 142, 1938) ガ家兔ヲ用ヒテ免疫血清ニ依リ。補體結合反應ヲ爲シタノニヨルニ。粘液腫ト纖維腫トハ別ノモノデアコトガ知ラレタ。然ルニ此ノ所見ハ下ノ人々ノ實驗所見ト相違シテ居ル。即チ Shope (Proc. Soc. Exp. Biol. & Med. 1938) ノ免疫學的研究所見ハ下ノ様デア。氏ノ發見シタ良性ノ纖維腫ヲ家兔ニ接種シテ。暫クスルト治癒スル。其時期ニ至ツテ。粘液腫ノ病毒ヲ感染サセテモ。罹患シナイ。對照動物ハ致死的變化ヲ起スニ拘ラズ。上記ノ動物ハ殆ンド何等認メ得ベキ變化ガナイコトヨリ見ルト。纖維腫ノ「ウイルス」罹患ニヨツテ。惡性粘液腫「ウイルス」ノ罹患ヲ防禦スル力ノ附與セラルルコトハ。「ウイルス」ノ存在ヲ稍々確實ニスルト共ニ兩種ノ腫瘍發生竝ニ免疫上。注目スベキ事實ト申シテヨイ様ニ思ハレル。

上記ノ所見ニ多少類似ノ事實ヲ尹日善。崔性章。梁源哲。金聖湜氏等(癌1938年)ガ報告シテ居ル。即チ乳嘴腫ノ「ウイルス」ニヨツテ。免疫ガ成立シ。次イデ施シタ接種ハ陰性ニ終ハルトイフコトデア。此種ノ免疫性ハ朝鮮ノ家兔ニ自然ニハ存シナイコトハ米國ニ於ケルト同様デア。ソシテ家兔ハ野兔ヨリモ鈍感デアルトイフ。茲ニ尙興味アルコトハ本「ウイルス」ヲ30分間紫外線デ照射スルト威力ガ衰ヘル。又「ビタミン」Cヲ注入スルト。「ウイルス」ヲ無力ナラシメルトイフコトデア。是等ノ所見ハ Shope 其他ノ人々ニヨツテ爲サレタ所見ト可ナリ似通ツテ居ルモノデア。

姜東完。柴田進氏等(癌1938年)ハ Shope ノ家兔乳嘴腫ノ「ウイルス」ノ大サヲ Elford ノ限外濾過法ニヨツテ。濾過シタノニヨルニ $0.170-0.255 m\mu$ (「コロジオン」膜ノ孔口 $0.34 m\mu$) ノ間ヨリモ聊カ小サイノデハナイカト言フテ居ルガ。此種ノ所見ハ。大ニ追試シ。檢索シテ見ルベキ問題ト考ヘラレルガ。兔ニ角本「ウイルス」ハ割合ニ大キイモノデハナイカト想像シ得ル節ガアル。

尹氏等ノ所見ト。信岡德氏(癌1938年)ガ家兔肉腫ノ發育ニ及ボス超短波ノ作用ニ關スル所見トヲ比較スルト非常ニ興味ガアル。4.5—6.58米等ノ超短波ヲ稍々大量ニ作用サセルト。肉腫ノ發育ハ完全ニ阻止スルシ。又轉移モ非常ニ少クナルトイフコト

對スル化學的研究ハ益々徹底的ニ遂行セラルベキ時期ニ到達シテ居ル様ニ思ハレ。獨リ組織學的、顯微鏡學的研究ヲ満足スルコトガ出來ナクナツタ様ニ思ハレル。

炎衝ノ發生機轉ニ關スル研究

Valey Menkin (米國 Boston ノ Harvard 大學 ノ 病理學教授)ハ 1929 年以來(J. Exp. Med. 50, 1929)炎衝ノ發生機轉ニ關シ種々ノ研究竝ニ考察ヲ爲シ、昨年 1 月マデニ 16 回ノ報告ヲ爲シ、終ニ組織學的考察ヨリ、病理化學的檢索ニ迄進ンデ來テ興味アル所見ヲ發表シテ居ル。其ノ 1, 2 ノ特ニ興味アル最近ノ所見ノ要點ヲ摘録シテ見ヤウ。炎衝ノ行ハルルヤ否ヤ、毛細管ノ努張、滲出物が現ハレル。此際、毛細管ニ著ルシク滲透性が嵩ツテ居ルコトハ「トリパン」青ヲ注入スルコトニヨツテ明ラカニ認メルコトガ出來ル。此ノ浸透性ヲ嵩メル物質ハ何ナリヤニ就イテ、1936 年(J. Exp. Med. 64)ニ一部ノ所見ヲ報告シ、ソレハ Histamine デハナイト言フテ居ル。即チ炎衝竈カラ浸出物ヲ集メ、硫化安門ニヨツテ沈澱サセ、透析シテ無蛋白ノ結晶ヲ得タ。ソレハ「ヒスタミン」ト極メテ近似デアアルガ、全然同一物ト言フコトガ出來ナイ。即チ活體染色上ノ所見、「モルモット」ノ腸ノ蠕動上ニ於ケル所見ニヨツテ、一致シナイ點ガアルカラデアルトイフノデアアル。此物質ニ關スル研究ニ深く突進ンデ、昨年ハ相當注目スベキ點ニ迄達シテ居ルト思フノデアアル即チ昨年 1 月ノ報告(同誌 67)ニヨルニ、炎衝性浸出物内ニアル、毛細血管擴張性浸透性ノアルモノハ下ノ如ク純粹ニ取り出スコトガ出來ルトイフテ居ル。即チ「ピリデン」、「アセトン」ニヨツテ浸出シ、蛋白質ヲ除イテ後ニ、「ブチール」酒精又ハ「アセトン」ニヨツテ永ク低温デ浸出シテ、純粹ニスルノデアアル。ソノ物ハ結晶性ノ二重屈折性含窒素物デアアルガ、蛋白質デハナイ。然シ「アミノ」酸「カルボキシル」群竝ニ「インドール」核(Adamkiewicz 反應陽性)ヲ有シ、透析性デ、濃厚硫化安門ニヨツテ沈澱スルカラ明ラカニ蛋白質ノ中間代謝物質ト見做スベキモノデアルト言フテ居ル。此種ノ研究ニ於テハ確カニ一新方法ト言フベキモノデアツテ、尙大ニ開發闡明セラルル新所見ガ加ハルコトデアラウト信ズルモノデアアル。

次イデ氏ハ炎衝竈ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ惹起スルノモ、本病竈ニ特殊ノ物質ガ先ヅ生成セラレ、ソレニヨツテ滲出セラルルノデアルトイフ意見ヲ發表シテ居ル。此種ノ物質ヲ亦炎衝竈ノ浸出液内ニ見出スコトガ出來ルトイヒ、之レニ「ロイコタキシン」Leukotaxine ナル名稱ヲ與ヘテ居ル。上記ト略ボ同様ノ操作ニヨツテ、炎衝竈ノ浸出液中ヨリ分離スルコトガ出來タ。此物ハ恐ラク蛋白質ノ分解質ノ分解産物デアツテ、炎衝ニヨツテ生成セラルルノデアアル。又他方「トリプシン」ニヨツテ、血清ヲ消化スルト、同様ノ性狀ヲ有スルモノヲ作ルコトガ出來ルトモ言フコトデ、多分「ポリペプテード」デアラウト迄斷言シテ居ル。此物が圓形細胞ヲ血行中ヨリ滲出スルノハ、全ク特殊ノ化學的親和性ニヨルノデアツテ、血管壁ニ浸透性が嵩リ、爲ニ浸出液ガ出ル。之レニヨツテ招來セラルルノデハナイ證左トシテハ、毛細管内ニ此物質ヲ納メテ、皮質組織内ニ入レテオクト、其内ニ白血球ガ侵入シテ來ルノヲ認メルコトガ出來タコトニヨツテモ明ラカダト言フノデアアル。

上記ノ如クシテ、炎衝ノ行ハレル際ニ浸出液ノ出來ルノハ、特種ノ物質ガ生成セラレテ、毛細管壁ニ變狀ガ起リ、爲メニ浸出物ガ出ルト同時ニ又、白血球ニ對シテ特種ノ親和性ヲ有スル物質モ生成セラレ、茲ニ白血球ノ滲出ガ起ツテ來ル、所謂細胞ノ浸潤ナル現象トナルノデアルト説明シテ居ル。從來ノ研究トハ確カニ異ナツタ行キ方デ、化學的檢索ヲ爲シテ居ル點ハ注意スベキダト思フ。

蕎麥攝食ト肝硬變其他ノ病變

由來朝鮮人ニハ驚クベキ計リニ肝硬變病ガ多イ。其原因ハ何ニアルデアラウカトイフコトニツイテ、多クノ先人ニヨツテ注意セラレ研究モセラレタ。鮮人ガ特ニ好ム唐辛子ニ何ニカ關係ガアルヤモ知レズトシテ、研究シタ人モ尠クナイ(森安連吉氏等)。然シ適確ナル所見ヲ得ラレナカツタ。然ルニ昨年ニ至ツテ、平壤ノ醫專教授久保久俊氏ハ藤本初穂、中山廣實氏(日本病理學會誌 28, 29, 昭和 13, 14 年)ト共ニ極メテ興味アル所見ヲ發表セラレテ居ル。即チ朝鮮人ノ最モ愛好シ常用スル蕎麥ヲ用ヒテ動物飼養ヲ爲シタ所ニヨルニ、驚クベキ病變ガ肝臟ヲ主トシテ、其他數個ノ臟器ヘ喚起セラル、コトヲ認メタノデアアル。今年度ハ此ノ病害性作用ヲ爲ス物質ノ化學的性状ニツイテ詳細ニ追究セラレタ所見ヲ發表セラレテ居ル。其要點ニ觸レテ見ルト家兎「ラッテ」、
「マウス」等ヲ蕎麥テ飼養スルト比較的短期間ノ内ニ、肝臟間質ノ驚クベキ増殖ガ起ル。從ツテ實質ノ萎縮ガアツテ、爲メニ所謂肝硬變ヲ起シ親シク氏ノ標本ヲ見ルト、Laennec ノ肝硬變像ト殆ンド區別ガ出來ナイト言ツテヨイモノデアアル。又可ナリ高度ノ脾臟肥大ガアリ胸腺ガ萎縮セズニ永ク殘ツテ居ル。腎臟實質細胞ニ種々ノ變化ガアリ、淋巴腺特ニ腸間膜腺ガ腫脹シ、骨質硬化ノ減退ガアルトイフコトデアアル。此實驗的所見ハ鮮人ノ剖檢所見ニ於テ胸腺ノ腫大ヲ見タリ、又骨軟化、頭蓋骨等ノ硬化減退等ノ所見ト全ク一致スルモノデアアル。鮮人ガ頭部ノ打撲等ニヨツテ頓死スルコトノアルノモ、頭蓋骨ガ非常ニ菲薄ナルコトニ何カ一連ノ關係ガアルノデハナイカトサヘ思ハルルトイフコトデアアリ、加フルニ彼等ニ特ニ多イ肝硬變症ハ此ノ蕎麥ノ愛用ト何等カノ關係アルヤニモ思ハルルノデアアル。氏等ハ本年ハ蕎麥ノ分析的研究所見ヲ發見シテ居ル。「エーテル」、酒精「ベンゾール」、
「アセトン」、四鹽化炭素等ノ溶媒ヲ用ヒ、「ソクスレット」浸出器ニヨツテ浸出物ヲ作り、之レヲ玄米ニ混ツテ上記ノ動物ニ與ヘタ。「ベンゾール」、四鹽化炭素抽出物ヲ僅カニ 1 ヶ月與ヘタノミテ既ニ典型的ノ肝硬變症ガ起リ、脾腫ヲ伴ツテ居タトイフ。「マウス」テハ酒精抽出物ヲ與ヘタノニ、大豆大ノ肝細胞腫ガ多發シテ居タ。家兎テハ「エーテル」抽出物ヲ與ヘタモノニ、最モ強イ肝硬變ガ起ツテ居ル。犬ニ於テモ同様ニ肝臟ニ著明ナ變化ガ現ハレタトイフコトデアアル。興味アル所見ト言ハナクテハナラナイト同時ニ是等脂肪溶解性溶媒ニヨル浸出物中ニ存スル物質ハ何ンデアアルカ、又其ノ種ノ物質ハ蕎麥以外ノモノニハナイカ否カノ點デアツテ、五穀ヲ主食トスル住民ニトツテハ重大ナル問題ト申サネバナラナイ。

抗體ノ精製ニ關スル研究

Felton(J. Imm. 22, 1932)ハ肺炎菌ノ第一、第二型ノ沈降素ハ水酸化「カルシウム」、
「ストロンチウム」ニ溶解シ、磷酸鹽ニヨツテ多糖類ガ沈澱スル。此方法ニヨツテ 80—85%ニ特異性ノ多糖類免疫體ヲ得ルトイフテ居ル。米國 Columbia 大學ノ Heiderberger, Kendall & Thcorell(J. Exp. Med. 36, 1936)ガ、食鹽水ノ濃度ヲ上昇スルニ從ツテ肺炎菌第三型ノ免疫血清中ヨリ特異性多糖體ハ沈澱シ抗體性蛋白體ヲ除去スルコトヲ知ツタ。此方法ヲ利用シテ、特異性沈降素ノ分離ノ可能ナルコトヲ案出シタノガ、1936 年ノコトデアアル。之レニヨツテ、肺炎菌第一、二型ノ馬、第三型ノ兎ノ免疫血清カラ、85—93%ノ免疫體ヲトルコトガ出來タ。之レラ Felton ノ方法

對スル化學的研究ハ益々徹底的ニ遂行セラルベキ時期ニ到達シテ居ル様ニ思ハレ、獨リ組織學的、顯微鏡學的研究ヲ満足スルコトガ出來ナクナツタ様ニ思ハレル。

炎衝ノ發生機轉ニ關スル研究

Valey Menkin (米國 Boston ノ Harvard 大學 ノ 病理學教授) ハ 1929 年以來 (J. Exp. Med. 50, 1929) 炎衝ノ發生機轉ニ關シ種々ノ研究竝ニ考察ヲ爲シ、昨年 1 月マデニ 16 回ノ報告ヲ爲シ、終ニ組織學的考察ヨリ、病理化學的檢索ニ迄進ンデ來テ興味アル所見ヲ發表シテ居ル。其ノ 1, 2 ノ特ニ興味アル最近ノ所見ノ要點ヲ摘録シテ見ヤウ。炎衝ノ行ハルルヤ否ヤ、毛細管ノ努張、滲出物が現ハレル。此際、毛細管ニ著ルシク滲透性が嵩ツテ居ルコトハ「トリパン」青ヲ注入スルコトニヨツテ明ラカニ認メルコトガ出來ル。此ノ滲透性ヲ嵩メル物質ハ何ナリヤニ就イテ、1936 年 (J. Exp. Med. 64) ニ一部ノ所見ヲ報告シ、ソレハ Histamine デハナイト言フテ居ル。即チ炎衝竈カラ滲出物ヲ集メ、硫化安門ニヨツテ沈澱サセ、透析シテ無蛋白ノ結晶ヲ得タ。ソレハ「ヒスタミン」ト極メテ近似デアアルガ、全然同一物ト言フコトガ出來ナイ。即チ活體染色上ノ所見、「モルモット」ノ腸ノ蠕動上ニ於ケル所見ニヨツテ、一致シナイ點ガアルカラデアルトイフノデアアル。此物質ニ關スル研究ニ深く突進ンデ、昨年ハ相當注目スベキ點ニ迄達シテ居ルト思フノデアアル即チ昨年 1 月ノ報告 (同誌 67) ニヨルニ、炎衝性滲出物内ニアル、毛細血管擴張性滲透性ノアルモノハ下ノ如ク純粹ニ取り出スコトガ出來ルトイフテ居ル。即チ「ピリデン」、「アセトン」ニヨツテ浸出シ、蛋白質ヲ除イテ後ニ、「ブチール」酒精又ハ「アセトン」ニヨツテ永ク低温デ浸出シテ、純粹ニスルノデアアル。ソノ物ハ結晶性ノ二重屈折性含窒素物デアアルガ、蛋白質デハナイ。然シ「アミノ」酸「カルボキシル」群竝ニ「インドール」核 (Adamkiewicz 反應陽性) ヲ有シ、透析性デ、濃厚硫化安門ニヨツテ沈澱スルカラ明ラカニ蛋白質ノ中間代謝物質ト見做スベキモノデアルト言フテ居ル。此種ノ研究ニ於テハ確カニ一新方法ト言フベキモノデアツテ、尙大ニ開發闡明セラルル新所見ガ加ハルコトデアラウト信ズルモノデアアル。

次イデ氏ハ炎衝竈ニ圓形細胞ノ浸潤ヲ惹起スルノモ、本病竈ニ特殊ノ物質ガ先ヅ生成セラレ、ソレニヨツテ滲出セラルルノデアルトイフ意見ヲ發表シテ居ル。此種ノ物質ヲ亦炎衝竈ノ滲出液内ニ見出スコトガ出來ルトイヒ、之レニ「ロイコタキシン」Leukotaxine ナル名稱ヲ與ヘテ居ル。上記ト略ボ同様ノ操作ニヨツテ、炎衝竈ノ滲出液中ヨリ分離スルコトガ出來タ。此物ハ恐ラク蛋白質ノ分解質ノ分解産物デアツテ、炎衝ニヨツテ生成セラルルノデアアル。又他方「トリブシン」ニヨツテ、血清ヲ消化スルト、同様ノ性状ヲ有スルモノヲ作ルコトガ出來ルトモ言フコトデ、多分「ボリペブテード」デアラウト迄斷言シテ居ル。此物が圓形細胞ヲ血行中ヨリ滲出スルノハ、全く特殊ノ化學的親和性ニヨルノデアツテ、血管壁ニ滲透性が嵩リ、爲ニ滲出液ガ出ル、之レニヨツテ招來セラルルノデハナイ證左トシテハ、毛細管内ニ此物質ヲ納メテ、皮質組織内ニ入レテオクト、其内ニ白血球ガ侵入シテ來ルノヲ認メルコトガ出來タコトニヨツテモ明ラカダト言フノデアアル。

ニヨツテ精製スルコトヲ企テ、可ナリ成功シテ居ル (Heiderberger & Kendall J. Exp. Med. 64, 1936)。

之レニ引キ繼ギ、Rockefeller 研究所ノ Goodner & Horsfall (J. Exp. Med. 66, 1937) ハ Heiderberger 等ノ方法ヲ變改應用シテ、肺炎菌免疫血清内ノ免疫體ノ分離ヲ企テ、略々純粹ノ状態ニスルコトガ出來、然カモ下ノ如キ興味アル所見ニ到達シテ居ル。第一型ノ馬ノ免疫血清内ニハ少クモ三種類以上ノ特異ノ抗體性蛋白質體ガアル。其ノ第 1 P 抗體ハ水溶性、PH 7.6「プソイドクロブリン」様物質ヲ多分「レチトプロテイン」テ、特異性多糖體ノ少量ノ附加ニヨツテ沈澱スル。此特異性ハ絶對的デナク、又「マウス」防禦力モ餘リ強クナイ。第 2 E 抗體ハ水ニ不溶、「オイグロブリン」様物質テ、ヤハリ一種ノ恐ラク「レチトプロテイン」テ、多糖體トノ結合カハ低イガ、「マウス」ニ於ケル防禦カハ非常ニ高ク、免疫學的ニ略々純粹状態ニ分離スルコトガ出來タ。第 3 ノ抗體ハ化學的性狀ハ不明デアアルガ、然シ免疫學的ニ其存在ハ認メナケレバナラナイ。ソシテ、之ヲ沈澱セシメルニハ比較的多量ノ多糖液ガ必要デアリ、且ツ「マウス」ニ於ケル防禦カハ低イトイフテ居ル。家兎ノ免疫血清内ニハ、二種ノ免疫體ガアル。第一型ハ上記ノ E 型ニ一致シ免疫體ノ大半ヲ占メテ居ツテ、防禦カハ非常ニ高イ。第二ノモノハ上記ノ馬血清ノ第三型免疫體ニ比較スベキモノデアアルトイフテ居ル、興味アル所見ト言フテヨイ。此ノ種ノ所見ハ益々加ヘラルベク、且ツ各種ノ免疫體ノ研究ニ應用セラルベキモノト思考セラル、ノデアアル。

昨年ノ報告ニヨルニ Eagle (J. Exp. Med. 67, 1938), Heiderberger, Grabar & Jroffers (J. Exp. Med. 68, 1938) ハ、精製シタ肺炎菌免疫體ノ作用ガ「フォルマリン」ニヨツテ惡影響セラレナイトイフテ居ル。之レハ Chow & Goebel (J. Exp. Med. 62, 1935) 等ノ所見ト相違スルノデアアルガ、然シ是等ノ所見ハ正シイ様ニ思ハレ、抗原、抗體ト「フォルマリン」トノ關係ハ、可ナリ興味深イ 1 個ノ命題トナツテ來タト信ズル。

Shwartzmann 反應物質ノ化學的性狀

Shwartzmann & Morell (J. Exp. Med. 66, 67, 1938) ハ Shwartzmann 反應物質ノ化學的性狀ニツイテ、數回ニ互ツテ報告シテ居ル。可ナリノ程度ニ明ラカニナリツ、アルコトハ注目スベキ事ト言ハナクテハナラナイ。即チ、反應性物質ハ Zsigmondy ノ限外濾過法ニヨツテ、100—120 $m\mu$ ヨリ小ナルモノデアリ、其終末點ハ 50—100 $m\mu$ ノ間ニアルトイフ事デアアル。硫化安門ヲ 3 分ノ 2 飽和スルコトニヨツテ、最モ濃厚ニスルコトガ出來、PH 3.0 以下ノ時ハ陰極ニ、4.0 以上ノ時ニハ陽極ニ集リ、等電値ハ PH 3.0—4.0 ノ間ニアル。恐ラクハ蛋白質、又ハ之レニ類似ノモノカトイフテ居ル。斯ノ如クソノ性狀ノ追究ヲ頻リニ遂行シテ居ル。

精製「ウイルス」ト腫瘍形成等

諸種濾過性病原體ハ濾過器ヲ利用スルコトニヨツテ、略々純粹ニ近イ状態ニナスコトガ出來ル様ニナリ、之ヲ利用シテ種々ノ注目スベキ研究ガ遂行セラレテ居ル。

他面腫瘍ノ形成ト局所ノ細胞ノ死滅トノ間ニハ可ナリ密接ノ關係ガアル。Caspari ハ、死滅細胞成分ノ刺戟ノミニヨツテモ、腺腫ノ形成ガアリ、トキニハ癌腫ト思ハル、モノガ出來ルコトスラアルトイフコトデアアル。即チ細胞成分ガ同種ノ生ケル細胞ニ對スル直接作用ノ結果招來セラルル現象デアアルトイフテ居ル。之レト稍々類似ノ研究ハ、家兎ノ耳ニ「タール」塗布ニヨツテ、腫瘍ノ形成セラルル機轉ニツイテデアアル。單ニ「タール」ヲ塗布スルコトニヨツテハ、却々ニ腫瘍ノ形成ガナイ。5、6 ヶ月、時ニハ 21 ヶ月間ヲ要スルコトモアル。然ルニ Shope ニヨツテ發見セラレタ米國野兎ノ乳嘴腫ノ Virus ヲ精製シテ、靜脈内ニ注入スルト「タール」塗布ノ部位ニ極

メテ容易ニ乳嘴腫ノミナラズ、癌腫ノ形成ガアリ、然カモ其病變ガ極メテ顯著デアルコトヲ Rous & Kidd (J. Exp. Med. 67, 1938) ガ報告シテ居ル。Lacassagne & Nyka Bull (Assn. franc. etude cancer 26, 1937) ガ「ペンツピレーン」ヲ用ヒテ、略ク同様ノ所見ヲ報告シテ居ル。Andrews Ahlström, Foulds & Gye. (Lancet 1937) モ略ク同様ノ結果ヲ得テ居ル。「タール」ヲ筋肉内ニ注入シオキ、然ル後ニ「ウイルス」ヲ血管内ニ注入スルト、廣汎ニ互ル纖維腫ノ發生ガアリ、然カモ局部ニ於テハ進行性ノ變化ガアツテ、悪性化シタカニ見ヘルコトスラアルトイフコトデアル。

茲ニ面白イコトニハ Teague & Goodpasture (J. Med. Research 24, 1923) ハ單純性「ヘルペス」ノ「ウイルス」ヲ精製シ豫メ「タール」塗布ヲ施シタル家兎ノ靜脈内ニ注入スル時ニハ、其處ニ帶狀疹ニ似タ病變ヲ惹起スルトイフコトデアル。

上記ノ如キ所見ト矢田與久氏(實驗醫學22, 昭和13年)ガ家兎ノ睪丸ニ微毒「スピロヘータ」ヲ接種シ、其鼻根部等ニ猩紅熱ヲ注入スルト容易ニ其處ニ轉移ガ出來ルコトヲ認メタ等ノ事實ト照合スルト、可ナリ興味アル現象ト言ハナクテハナラナイ。

上記ノ如キ前處置、即チ「タール」、「ペンツピレーン」猩紅熱等ノ塗布又ハ注入ニヨツテ局部ノ細胞ニ死滅ヲ招來スル時ニハ、血行内ニ存スル病毒ハ容易ニ其處ニ定著スルコトハ考ヘ易イ事デアアル。其際如何ナル方法ニヨツテ細胞ノ死ヲ來サシメテモ、結果ハ全ク同一ナリヤト言フニ、決シテソウデハナイノデアアル。上記ノ腫瘍ノ形成ノ場合ニ於テモ、亦微毒ノ轉移等ノ場合ニ於テモ同様デアツテ、アル特殊ノ方法ニヨツテ、操作スルコトガ最モヨイトイフコトガ知ラレテ居ルノデアアル。何故デアアルデアラウカ、解決シテ見タイ事實デアツテ、單ニ細胞ノ死ニヨル局部ノ生理的抵抗ノ減退トイフコトノミニヨツテハ説明ハ出來ナイノデアアル。尙此種ノ方法ニヨツテ、濾過性病毒ノ特性ニ關スル研究モ進メテ見タイ事項ノ一ツデアアルト同時ニ、所謂惡性腫瘍ガ或ル種ノ血行中ニアル病毒ノ作用ニヨツテ、特定ノ部位ニ特ニ好シテ發來スルトイフガ如キ事實ハ、本病ノ性状、特ニ好發部位ニ關スル研究ニ何等カノ暗示ヲ與ヘルカニ思ハルルノデアアル。

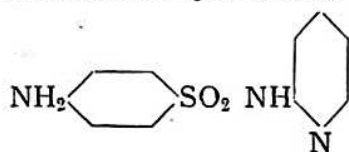
九. 醫化學界ニ於ケル注目スベキ事

醫化學界ニ於テ、昨年中ニ2.3ノ注目スベキ新事項ガ報告セラレテ居ル。特ニ治療學界ニ於ケルソレデアアル。「アゾ」色素劑トカ、所謂「プロントジル」竝ニソノ近似品トカ、「ホルモン」、「ビタミン」等ニ關スルモノト早合點シテハイケナイ。勿論是等ノモノニ於ケル新知見モ決シテ少クハナイ。特ニ本邦ノ治療界ニ於テハ「プロントジル」ガ藥品ノ第一位ニアルガ、残念ナガラ最良ノモノト言ハレル紅色「プロントジル」ハ Bayer ノ專賣ニ附セラレテ居ル有様デアツテ、本邦人ノ手ニヨル劃期的ノ進歩ガ見ラレナイコトハ淋シイ氣ガスル。此際、之レヲ離レタル1, 2ノ報告ヲ見タコトハ愉快デアアル。

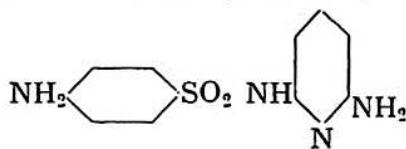
肺炎ノ新治療藥

May & Baker ガ1938年ニ極メテ注目スベキ肺炎菌治療藥ヲ提供シタ。之レト全ク無關係ニ同年長谷川秀治及津田恭介、鈴木貫一氏等モ亦、同一物ト見做スベキ新藥ヲ用ヒ驚クベキ效果ヲ認メ、之レヲ本年報告セラレタ。特ニ長谷川、津田氏等ノ研究ハ May & Baker ノソレヨリモ遙カニ進ンデ居リ、所謂化學的治療界ニ於テ Pron-tosil ニ優ルトモ劣ラザルモノヲ見出サレタノハ、學界ノ爲メ、治療醫界ノ爲メニ愉

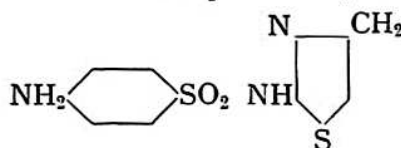
Pr. 10 2-(P-aminobenzol sulphon amid) Pyridin



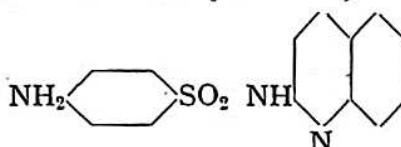
Pr. 11 2-(P-aminobenzol sulyhon amid)-6-amio pyridin



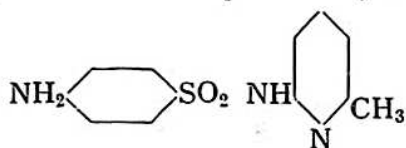
Pr. 12 2-(P-aminobenzol sulphon amid)-4-methylthiazol



Pr. 13 2-(P-aminobenzol sulphon amid)-Chinolin



Pr. 14 2-(P-aminobenzol sulphon amid)-6-Methyl-pyridin



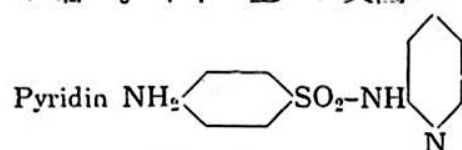
等デアルト報告セラレテ居ル。

本所ニ於ケル長谷川氏等ノ動物實驗上ノ所見ニ於テハ、第1、3型ノ肺炎菌ヲ約13瓦ノ「マウス」ニ感染シ治療「マウス」ハ是等菌型ノ100—1000倍ノ菌量ヲ腹腔内ニ注入シ藥劑ハ菌接種後2時間、翌日、2日目、3日目、5日目ノ5回ニ分ケテ經口ニ投與シ、10日間觀察シテ居ラレル。斃死シタ動物ハ、心血中ヨリ肺炎菌ノ有無ヲ檢查シテ居ルコトハ申ス迄モナイ。對照動物ハ48時間以內ニ全部斃死シテ居ルガ、本劑ノ1定量以上ヲ投與シタ動物ハ略々之レヲ救助スル事ガ出來テ、極メテ注目スベキ成績ヲ得テ居ラレル。菌型ニヨツテ多少ノ相違ガアリ、第1型ニ對シテ特ニ有效デアアル。上記5種ノ藥品中、10、12、14號ガ特ニ優秀ナル作用ヲ示スト言ハレ、然カモ12、14號ハ全ク氏等ノ創製ニ係ルモノデアルトイフコトハ特記スルニ値スルト信ズル。然カモ其毒性ハ10號ト略々同様デ一般ニ「スルフォンアミド」ハ「スルファンルアミド」ヨリ毒性ガ低イト言フコトデアアル。然カモ連鎖狀球菌、淋菌ニモ著ルシイ殺菌作用ガアリ、本所ニ於テ數例ノ人體ノ肺炎ニ試用シテ著效ヲ認メテ居ルノデアアル。

同氏等ノ研究ハ其後益々進メラレ次第ニ多クノ新製品ガ實驗ニ供セラレテ居ルト同時ニ、是等新製品ガ、一般ノ需要ニ應ズルコトモ決シテ遠イコトデハアルマイト信ズルモノデアアル。近時、各新製劑ハ歐米ニ於テ何レモ專賣特許ニ附セラレ、本邦ニ於テハ製造スルコトガ出來ナイ、誠ニ顯著ナル科學的封鎖ノ厄ニ遭ヒツツアルノデアアル。

快ニ耐ヘナイ次第デアツテ、然カモ此種ノモノガ本所員ノ手ニヨツテ成ツタコトハ、昨年度ニ於ケル本所ノ研究中、特ニ注目スベキモノノ一ツデアリ、本記念日ニ當リ、聲ヲ大ニシテ其功ヲタタヘタイモノト信ズル。

May & Baker ノ M & B 693, (Dagenan) ハ世ヲ擧ゲテ「ズルファニールアミド」 Sulphanilamide (Paraminobenzene sulphonamide) ノ溶血性連鎖狀球菌ニ對スル偉力ニ陶醉シテ居ル際ニ、肺炎菌ニ對シテハ左程ニ有效デナイトイハレテ居ツタ。即チ Domagk (1935-6) ハ Prontosil (2:4, diamino-4-sulphonamido-azobenzene) ハ肺炎菌第三型ニ多少効果ガアルガ第一、二型ニハ無效デアルコトヲ明ラカニシタ。其他ノ所見モ略々之レニ一致シ肺炎菌ニ有效ナルモノヲ得ントシテ、八方ヨリ研究セラレ、其類似品ガ世ニ提供セラレテ居ル。昨年ニ至ツテ英國ノ May & Baker ハ 2-(P-ami-



nobenzene sulphonamide) 所謂 M & B 693 ナルモノヲ提供シシタ。ソレガ極メテ優秀ナル作用アル事ヲ Whitley, Camh & Lond ガ動物實驗ニヨツテ決定シタ。「マウス」ニ罹患ノ肺炎菌ノ致死量ノ 1 萬倍ヲ防禦セシメルトイフコトデアル。而モ肺炎菌ノ第一、二、三、五、七、八型ニ有效デ特ニ第一、七、八型ニヨク作用シ、本菌ノ被包ニ確實ニ働キ、溶血性連鎖狀球菌竝ニ腦膜炎球菌ニモ作用スルトイフコトヲ昨年 5 月ノ Lancet ニ報告スルヤ、特ニ英國醫界ニ異常ナル注意ヲ喚起スルニ至ツタ。同誌ノ 7 月號ニ Evans & Gaisford ハ 100 例ノ肺葉性肺炎ニ本劑ヲ 0.5 瓦宛經口的ニ使用シ、對照ニ於テハ 27% ノ死亡率ノアツタモノヲ 8% ニ低下サセル事ガ出來タトイフ。Dyke & Oxon ハ 61 歳ノ老婆ノ肺炎球菌ノ敗血症ニ本劑ヲ多量ニ用ヒテ、極メテヨイ成績ヲ得、治癒セシメタト 9 月ノ同誌ニ報告シテ居ル。即チ最初ハ毎 4 時間毎ニ 1 瓦宛、次イデ 8 時間毎ニ 1 瓦宛ヲ用ヒ、全量 24 瓦ヲ用ヒテ、何等中毒ガナカツタノミナラズ、忽チ治癒セシメ得タトイッテ居ル。Fenton & Hodgkiss ハ 35 歳ノ男子ノ葡萄狀球菌敗血症ニ有效ナリシ由ヲ同年同月ノ同誌ニ報告セラレタ。其外、連鎖狀球菌、腦膜炎菌敗血症、Maegraith & Vollum (Br. M. J. 1938) 淋菌性疾患 (Batchelor, Lees, Mnrrell Br. M. J. 1938) ニモ有效ナル報告ガ現ハレテ居テ、英國治療醫界ニ於テハ Prontosil ニ優ルトモ劣ラズ、正ニ「サルヴアルサン」發見以來ノ重大ナルモノデアルトシテ、大ニ推獎シ Dagenan ト命名シア近時盛ニ發賣シテ居ル。

長谷川、津田氏ノ Pr. 10 號等

長谷川氏等ハ多年、肺炎ノ化學療法ヲ研究シ、種々ノ方面ヨリ新化學藥品ヲ製出シ肺炎菌ヲ「マウス」ニ感染シ、實驗的ニ治療研究ノ歩ヲ進メツツ昨年ニ至ツテ Pr. 10, 11, 12, 13, 14 號等ノ製品ヲ作り出ス事ガ出來タ。其 10 號ハ上記ノ Dagenan ト構造ニ於テハ全ク同一ノモノノ様ニ思ハレル節ガアル。然ルニ之レガ製法ハ英國ニ於テハ全ク發表シテ居ラナイガ、津田氏ハ鈴木貫一氏 (藥學雜誌 59, 14 年) ト共ニ是等ノモノヲ公表シタ。之レガ要點ヲ記シテ見ルニ

化學的計數ニハ多少ノ誤差ガアルトイフテモヨイ様ニ迄思ハレテ居ル。

同様ニ分光學的研究ニヨツテ、酸素ノ原子量モ、16ノモノ、外ニ17、18ノモノガアルコトガ明ラカニナツタ。其割合ハ $O_{16}: O_{17}: O_{18}=1:0,0003:0,002$ デアルコトヲ知ラレテ居ル。

水ハ水素ト酸素ノ化合物デアツテ、同位元素各二宛ヲトツテモ HHO_{16} 、 HDO_{16} 、 DDO_{16} 、 HHO_{17} 、 HDO_{17} 、 DDO_{17} 、 HHO_{18} 、 HDO_{18} 、 DDO_{18} ノ多數ガ出來ルコトニナリ、普通ノ水ハ HHO_{16} デアルガ、之レニハ普通水素ノ重イモノガ、アル量ニ含マレテ居ル。之ヲ重水トイフテ居ルノデアル。狹義テ單ニ重水トイフノハ水素ガ重水素ノミニヨツテナツテ居ル D_2O_{16} ノモノヲイフテ居ル。之ガ如何ナル意義ヲ生物界ニ有スルデアラウカ、知ラナクテハナラナイ事柄デアアル。化學界ニ於テハ千谷利三氏が特ニ重酸素ノ分布ニツイテ多クノ貴重ナル研究ヲ發表セラレ、堀内壽郎氏ハ重水、重水素ト電極ノ機構ニツイテ、決定的創見ヲ發表シ、氏ノ二路說 Dual theory ハ一般ニ認メラレ多クノ追試ガアルトイフコトデアアル。

生物學的ニハ千谷氏ハ1935年(大阪醫事新誌)ニ伊藤、伊ノ諸氏ト共ニ重水ガ結核菌ニ及ボス影響ヲ檢索シ、重水濃度2%以下ノ時ニハ濃度大ナル程、繁殖ガ旺盛デアルトイフコトデアアル。

Caldwell & Deebbeling(Jl. Biol. Chem. 193)ハ重水ノ酸素ニ對スル影響ヲ檢索シテ居ル。即チ種々ノ濃度ノ重水内ニ於テ、大麥ヲ發芽サセ、「アミラーゼ」ニ及ボス影響ヲ檢シタノニヨルト D_2O ヲ1—10%ニ有スルモノハ發芽上ニモ酸素作用上ニモ影響ハナイ。100%ニスルト兩者ガ共ニ抑制作用ヲ受ケ、「アミラーゼ」ノ澱粉液化作用(α 作用)ノ方が糖化作用(β 作用)ヨリモ影響セラルルコトが多イト言ツテ居ル。此種ノ影響ハ他ノ酵素ニ對シテモ亦、アラユル生物學的作用上ニ對シテモ存スルコトハ想像ニ難クナイ。重酸素重水、重水素重水等ニ夫々特有ナル性狀ノアルコトモ想像ニ難クナイデアツテ、化學反應上ニハ多少ノ相違ガ認メラレツツアルノデアアル。重水ヲ得ルコトハ、今日左程困難デハナクナツテ居ル。之ヲ利用シテ種々ノ生物學的反應ヲ再檢討シテ見ルコトハ、確カニ一新方面ト思考スルモノデアツテ、僅カナガラ知見ヲ報セラレツツアル際、特ニ一言スル次號テル。

十、結核ノ化學療法

結核ノ化學療法位、古來アラユル方面ヨリ研究セラレ、然カモ充分ノ結果ヲ得ラレテ居ラナイモノハナイト言フテモ、差支ヘナイ位ニ思ハレルノデアアル。然ルニ長谷川秀治氏(日本結核病學會第17回、昭和14年)ガ多年、從來ノ化學療法トハ全ク行キ方ヲ異ニシテ居ル方法ニヨツテ、地問題ヲ取り上げ、「テトランドリン」、「ツエブアランチン」等ノ熱帶地ノ植物ニ存スル「アルカロイド」ニヨル治療ガ、動物實驗上注目スベキ所見ヲ擧ゲラルルコトヲ報告シテ居ラレル。此方面ニ於テ益々發展シ、進歩ヲ來サンコトヲ期待シ得ルト同時ニ、1日モ早く、合成的ニ特殊ノ藥劑ヲ得テ、廣ク人類ノソレニ應用シタル所見ヲ得タイト念願スルノデアアル。由來、動物ニ於ケル結核ハ人類ニ於ケルソレト比較スル時ニハ夫々特徴ガアツテ、特ニ動物ノ種類ヲ注意スルコトガ極メテ大切デアアル。家兎ノ如キハ、自然治療スルモノガ却々ニ多イノデ、「モルモット」トハ非常ナル相違ガアリ、「ラッテ」ハ其中間ニ存スルガ如キモノデアアル。人類ノソレハ、一面ニハ「モルモット」ノソレニ比較スベキ様ナ場合ガ却々ニ多イコトハ、家兎等ニ於ケルソレトハ著シイ相違デアアル様ニ思ハレルノデアアル。

其ノ最モ注目スベキ例ハ、「マラリア」ニ對スル「アテブリン」、「ブラスモヒン」ノ如キデア。 「ゲルマニン」ノ如キモ邦人ニ何時必要ニナルカモ知レナイトサヘ思ハルル時ニ當ツテ、此種ノモノガ邦人ノ獨創ニヨツテ製出セラレタコトハ愉快ニ耐ヘナイノデア。

「サントニン」ノ藥效形

「サントニン」ノ蛔蟲驅除ヲ爲ス藥效形ニツイテハ古來非常ニ檢討セラレテ居ルモノデアツテ、今日ニ至ル迄、尙確定シタトイフニ至ラナイ。腸管ヨリ吸收セラレ、或形ニ變化シタモノガ作用スルコトハ疑ハナイ。「サントニン」酸ガ有效形デアルトイヒ、又實際、ソレニ相當ノ驅蟲作用ガアルコトモ認メラレテ居ル、刈米達夫氏等ニヨルニ菊科植物「オホグルマ」ノ根ニ含有セラレテ居ル「アラントラクトン」ハ「デスオキシサントニン」デアツテ、ヤハリ蛔蟲驅除ノ作用ガアルトイフテ居ル。茲ニ注目スベキコトハ、最近朝比奈泰彦氏ノ研究デア。 「サントニン」ハ一旦腸管ヨリ吸收セラレ、「ヒノール」ニ變化シ、之レガ腸管ニ再ビ排泄セラルル時ニ、蛔蟲ノ驅除作用ヲ爲ストイフノデア。 「テトラリン」カラ「ヒノール」ヲ誘導シ、合成シテ、此ノ有效型ヲ得、動物竝ニ人體ニ使用シテ、著效ヲ認メ、然カモ「サントニン」ニ少シモ劣ラナイト言ハレテ居ル。加フルニ「サントニン」ノ如ク副作用ガナイ。「サントニン」ニハ採取ノ時期等ニヨツテ、少シモ效果ノナイモノモアルガ、合成品ニ於テハ、其種ノ心配ハ少シモナイ、常ニ藥効力ガ一定シテ居ルコトハ申ス迄モナイ。合成藥ノ發達上、注目スベキ一事實ト申サネバナラナイノデ、1日モ早く廣ク世ニ提供セラレンコトヲ望ンデ止マナイ。

「アメーバ」赤痢治療劑トシテノ「カルバイン」、之ハ臺灣、ジャワ、布哇等ニ多産スル胡瓜ノ葉ヨリ得タ鹽基デ古クヨリ知ラレタ物デア。強心作用ガアルト言ハレテ居タガ、臺灣ニ於ケル杜聰明氏ノ研究ニヨレバ「アメーバ」ノ榮養型ニ作用シ、之レヲ殺滅スル力ガアルトイフコトデア。 「エメチン」ニ匹敵スベキモノデアツテ、而モ忌ハシキ副作用ガナイ。「ヤートレン」ト併用スルト、其效果ガ一層加ハルト言ハレテ居ル。近時吐根ノ輸入ガ困難トナリ、然カモ「アメーバ」性赤痢患者ハ益々多キヲ加ヘントスル時ニ當ツテ注目スベキ事實ト申シテヨイ。多クノ追試所見ヲ得タイト願フモノデア。

重水、重水素、重酸素等ノ醫學上ニ於ケル意義

基礎的研究所見ガ、發見當時ニ於テハ左程世ノ注意ヲ惹カナイ程度ノモノデアツタノニ拘ラズ、將來重大ナル意義ヲ齎ラシタコトノ例ハ非常ニ深山ニアル。重水、重水素、重酸素等ノ發見モ亦其例ニ漏レナイト思フ。1931年ニ Urey ガ「スペクトル」ノ研究ニヨツテ、水素ノ原子量ニモノ、存在ヲ認メ、然カモ普通水素ノ中ニハ0.02%モアルコトヲ明ラカニシタ。此水素ヲ D (Deuterium) 又ハ H_2 ノ記號ヲ表ハシテ居ル。此外原子量三ノ水素モアルトイハレテ居ルガ、其量ハ非常ニ少イモノデアラシイ。此事實ト、強力ナル電氣ノ作用ニヨツテ原子核ガ甲ヨリ乙ニ移動スルトイフ事實ト思ヒ合セテ見ルト、原子ハ物質構成ノ單位ヲ確固不動デアルトイフ觀念ハ改メナケレバナラナイコトニナツタ。然カモアラユル原子ノ基礎的數値ノ核ト思ハレテ居ル水素原子ニ於テ、既ニソウデアラカラ、今日迄水素原子ヲ1(1.0078)ト見做シテ計算シテキタ多クノ

者ハ10年來、關節「リウマチス」ヲ有シ、15年來兩側ノ肺結核ニ悩ミ、3年來肋膜炎ガアツタガ外見上榮養モヨク、今回ノ發熱ニ對シテハ、之レトイフ發熱竈ヲ見出シ難ク、且ツ諸種ノ治療ガ效果ヲ現サレズ、最後ニ輸血ヲ施スニ至ツタノデアル。此種ノ輸血ノ治療效果ニツイテ、色々解説シテ居ルガ、要スルニ組織ノ轉調ニ基因シテ居ルコトハ申ス迄モナク、何ニガ如何ニ轉調シタカガ知リタイ事デアル。

戰場ニ於ケル輸血法

戰場、急救ノ場合ニ於ケル輸血法ニツイテハ各國ニ於テ非常ニ研究セラレテ居ル。Theo Marell (D. m. W. 1938) ハ、之レニツイテ英佛ニ於ケル状態ト、自己ノ意見ヲ述ベテ居ル、參考トスルニ足ルモノガアル。英國ニ於テハ常ニ一定數ノ給血者ヲ定メテ居リ、佛軍デハ豫メ各人ノ血型ヲ定メ手帳ニ記入セラレテ居ル。「スペイン」ノ赤軍ニ於テハ4ヶ所ニ中心地ガアツテ、主トシテ婦人ヨリナル約1千人ノ給血者ガアツタトイフ。血液ハ何レモ保存シタモノデ3.8%ノ枸橼酸曹達ヲ加ヘ、0.4度ニ貯ヘ、且ツ之レヲ戰場ニ輸送スルニモ此溫度ニ保タシメテアル。血液ハ300 ccノ「アンブル」入りトシ、用ニ臨ンデ40度ニ温メテ使用シテ居ル。受血者ノ血型ヲ定メルニハ上記ノ如ク豫メ定メテおくコトハ最モヨイガ、其暇ノナイ時ニハ、試験紙法ヲ利用スルコトモヨカラウ。給血者ハ1ヶ月ニ300—500 cc迄ハ採取シテモヨイトモイフテ居ル。之レニヨツテ野戰ニ於テモ輸血スルコトハ困難デナイトノコトデアル。

「ブロンジル」ノ中毒

「ズルファニル・アミド」Sulfanilamide (Paramino benzensulfonamide) ガ、近時ノ細菌性疾患ノ治療劑トシテハ正ニ王者ノ地位ニアル事ハ内外ノ文獻ノ等シク報ズル所デアリ、又比較的毒性ガ低イトモ言ハレテ居ル。Marshall, Cutting & Emerson (J. Am. M. Ass. 110, 1938) ガ種々ノ動物ヲ用ヒテ、毒性ヲ檢シタノニモ犬、兎等デハ、血像上ニモ殆ド變化ガナイ。一時的ニ腎臟障礙ガアルトイフコトデアルガ、他ノ報告デハ却々ニソウデハナイ。Adair, Hesselline & Hae (同誌 111, 1938) ニヨルニ、本劑ハ乳汁内ニ現ハレテ來ルカラ、乳母ニハ使用シナイガヨイ。又妊娠家兎ニ與ヘルト、胎兒ハ却々ニ影響ヲ蒙ツテ死スルモノガ多イ。人間ニ於テモ、胎盤竝ニ臍帶ノ血液内ニ現ハレ、且ツ胎兒ニ惡影響ヲ及ボスコトガ少クナイカラ、妊娠ニ使用スル時ニハヤハリ、可ナリ注意セヨトイッテ居ル。血像特ニ白血球上ニハ相當顯著ナル影響ヲ及ボスコトハ、其構造上カラモ考ヘラレル。Bigler, Clifton, Werner (同誌 110, 1938) ノ所見ハ一時的白血球ノ減少ヲ起ス位ノコトデアツタトイフガ、Schwartz, Gravin & Koletsky 及ビ Berg, Newark Holtzman (同上) ハ共ニ顆粒白血球ノ缺乏症ニ陥リ致死ノ轉歸ヲトツタ例ヲ報告シテ居ル。茲ニ特ニ注意スベキハ Cline (同誌 111, 1938) ハ急性黃色肝臟萎縮デ致死ノ運命ニ陥ツタモノヲ見テ居ル事デアル。著者ハ本年4月某醫ト對診ニ於テ、之レト同一ノ例ヲ經驗シタ。39歳ノ男子デ、中耳炎ノ爲メニ本劑ヲ1ヶ月有餘連用サセラレタ。然ルニ突然全身違和ヲ起シ發熱、次イデ、高度ノ黄疸ヲ起シ、肝臟ハ次第ニ縮小シテ終ツタ。尿中ニハ「ロイチン」、「チロシン」ガ多量ニ排

長谷川博士ハ近藤、富田兩藥學博士ト共ニ 1928 年以來此方面ノ研究ニ從事シタノデアアル。或ル種ノ「アルカロイド」ガ「ハブ」毒、「レチチン」溶血現象ヲ阻止スルコトヲ認メ其物が結核菌ニ對シテ試験管内ニ於テ殺菌作用ガアリ、天竺鼠ノ結核ニ治癒的影響アルコトヲ認メタノガ研究ノ端緒デアアル。其際用ヒタ「アルカロイド」ハ植物内ニ含有セラル、Dauricin, Tetrandrin, Cepharanthin 等々約 70 種ノモノデ、其中防己科植物ノ *Stephania cepharantha* 「タマサキツヅラフヂ」ノ中ニアル Isotetrandrin, Cepharanthin ガ最モヨク作用スルコトヲ見出サレタ。此「アルカロイド」ハ Biscoclaurin 系ニ屬スルモノデアルトイフコトデアアル。ソノ中ニ橋狀酸素ヲ有シ合成セント努力中デアアル。茲ニ同氏等ノ研究中ニ於テ尙興味アルコトハ Wright ノ載物硝子上ニ於ケル結核菌培養ト藥劑ノ本菌發育阻止作用トノ應用デアツテ動物體中ニ於ケル治療効果ト略々並行スル所見ヲ得ラレ、之ニヨツテ藥劑ノ效果ニ或種ノ目標ヲ置カウト言フノデアアル。一新方法ト申シテヨカラウ。

氏等ハ試験劑ヲ一方ニ於テハ臺灣産ノ植物ニ求メ、他方ニ於テハ合成ヲ爲シテ、ヨリ一層ヨイ化學的治療劑ヲ世ニ提供セント努力シテ居ルノデアアル。動物實驗上ノ所見ニ於テハ顯著ナルモノガアリ、又之レヲ人體ニ使用セラレタル多少ノ所見モアルガ、尙一層多キヲ加フベキヲ必要トスルシ、且ツ人體ニ於ケル結核位、多様ノ經過ヲトルモノハ、他ニハナイト言フテモヨイ位ノモノデアアルカラ、最後ノ斷定ヲ下スニハ、多方面ヨリ爲サレタルモノデナケレバナラナイガ、然シ、同君ノ動物實驗上ノ所見ハ極メテ注目スベキモノト信ズルト同時ニ、今後ノ大成ヲ希フモノデアアル。

十一、一二ノ注目スベキ臨牀所見

狭心症ノ外科的療法

Bukarest ノ Danielopolu 教授 (D. m. W. 1938) ハ多年氏ノ經驗ヲ發表シ、相當ニヨイ成績ヲ見テ居ル。氏ハ心臟ニ來ル抑制神經ノ反射ヲ除外セントスル方法デ之レヲ Pressor-Reflex-Ausschaltung ト稱シテ居ル。ソノ爲メニハ迷走神經ノ本幹切斷ト星狀神經節トヲ除去スレバヨイノデアアル。此目的ノ爲メニ通常下ノ手術ヲ爲シテ居ル。即チ脊椎神經ノ C₅-D₂ ノ結合枝、迷走神經竝ニ交感神經枝ヲ切斷スルコトヲ第一次ノ手術トシ、第二次トシテハ頸部交感神經ヲ切斷スルノデアアル。1 個ノ方法トシテ記載シテオキタイ。然シ氏ハ此種ノ手術ヲ爲ス前ニ、必ズ內科的處置ヲ盡シ、效果ノ擧ラナイ時ニ實行セヨトイツテ居ル。即チ最後ノ方法ト見做スベキデアアル。

異型血球ノ輸血ニヨル奇跡的治療效果

München ム Kämmerer 教授 (D. m. W. 1938) ハ 30 歳ノ男兒ノ不明ノ突發的熱性疾患ニ對シテ、誤ツテ O 型ノモノニ B 型ノ血液 120 cc ヲ注入シタ。注入中ニ既ニ苦悶ヲ訴ヘ、注入ヲ中絶スルノ止ムナキニ至ツタ。之レニ次ギ、嘔氣、嘔吐、諸所ノ疼痛、厥冷蒼白、心機衰弱、虛脫感アリ間モナク惡寒戰慄、40.6 度ノ發熱ガアツタガ、不思議ニモ其夜ノ中ニ解熱シ、總テノ今日迄ノ苦訴ハ全ク失ハレテ、此報告ヲナス迄 8 週間ニ亙ツテ全ク何等ノ症狀モナク、全然平常ノ通りデアルトイツテ居ル。元來此患

ニ最モ多イ。女子ノ約 3.4 倍以上ノ率ニアルトセラルル胃癌ニ對シテハ、此ノ照射療法ニヨツテハ、今日迄充分ナル成績ヲ擧ゲルコトガ出來ナカツタ。爲メニ「レントゲン」、「ラヂウム」ニヨル恩惠ハ此方面ニ於テハ婦人ニ獨占セラレテ居ル傾キガアツタ。然ルニ中泉正徳教授ハ種々考案ヲ廻ラサレ、集光照射法ヲ案出シ、之レヲ中澤、足立氏(日本「レントゲン」學會、15、16、昭和12、3年)ト共ニ數回ニ互ツテ報告シテ居ラレル。即チ一般内科、外科ニ於テハ治療不可能トセラルルモノニ於テ、宿醉ヲ殆ンド起サナイコト、食慾ヲ増加シ腫瘍ハ縮小シ、潛血反應ハ陰性化セシメ得タモノヲ多數例ニ於テ見ラレ、集光照射法ノ優秀ナルコトヲ報告シテ居ラルルコトハ、極メテ愉快ニ耐ヘナイ。

電子顯微鏡

獨逸ノ Siemens ノ研究所ニヨツテ發明セラレタ Electron Microscope デアツテ、陰極線ヲ光線ノ代リニ用ヒテ電子「レンズ」ニヨツテ物體ノ表面、又ハ内部ノ構造ヲ擴大シテ見ヨウトスル装置デアツテ(科學智識 18、昭和13年)、顯微鏡ノ内部ハ電子ヲ自由ニ運動サセル爲メニ真空ニナツテ居ルトイフ、之レガ最モ重要ナル點デアルトイフコトデモアル。之ニヨツテ數千倍ノ大キサニ擴大スル事が出來、又寫眞撮影ニヨツテ一層ノ大キサニ引伸バシ、1 萬倍ニスルコトモ容易デアルカラ、從來ノ顯微鏡ニヨツテハ不可視トセラレテ居タモノモ、比較的容易ニ見得ル様ニナリ、所謂「ウイルス」病ノ研究ニハ劃期的效果ヲ齎ラスノデハナイカト期待セラレテ居ル。然シ本品ハ尙研究ノ途上ニアルモノデアリ、吾國ニ於テモ盛ニ研究セラレテ居ルトイフコトデアル。Siemens ノソレハ時價 20 萬圓トイハレテ居ルガ、恐ラク其 10 分ノ 1 ノ價格ヲ以テ國産品ヲ手ニ入レルコトモ遠クハアルマイ。

限外遠心器

Beams & Pickels (Rev. Scient, Instr, 1935) ガ限外遠心器 Ultracentrifuge ヲ考案記載シタ。Chiles & Severinghans (J. Exp. Med. 68, 1939) ハ一層之ヲ改良シ、真空中ニ廻轉スル限外遠心器ヲ考案シテ居ル。10 本ノ試験管ハ 55cc ヲ有シ 45 度ニ傾斜シテ居ル。廻轉數ハ 51,900 RPM デアツテ、廻轉水柱ノ上部ハ 10 萬倍、下部ハ 20 萬倍ノ重力ヲ有スルトイフ。之レニヨツテ諸種微生物竝ニ Hormon 等ノ蒐集ニ利用セントスルモノデアツテ、從來本所ニ於テ用ヒラレテ居ル、1 萬廻轉ノモノヨリ遙カニ高速度ノモノト言ハナケレバナラナイ。(以上) (昭和 14 年 6 月 1 日)

學術集談會

5 月 25 日(木)午後 I 時カラ 講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ、演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 種痘免疫ニ關スル實驗的研究
安藤 誠治君
2. 「カラ・アザール」(黑熱病)ニ關スル研究(第三報)

(1) 家兎前眼房内接種ニヨル所見

(2) 胎盤感染ニ關スル實驗

{ 石井信太郎君
澤田 利貞君
清水 重矢君

3. 「アナフィラキシー」ニ關スル實驗的研究
除感作ト抗過敏症「アナフィラキシー」ノ遺傳等ニ就テ

{ 中村 敬三君
大須賀謙一君

出シ、高熱ト高度ノ黄疸トニヨツテ、意識ハ全ク昏迷ニ陥ツテ、百方治療ヲ盡シタガ、1週日ノ経過ヲ以テ、終ニ鬼籍ニ入ツタノデアアル。臨牀的検査ガ不充分デアリ、又剖檢ヲ爲シテ居ナイガ、本症ヲ急性肝臟萎縮症トイフコトニハ、大體差支ヘナイト信ズルモノデアアル。本劑ヲ不要ニ連用スルコトハ注意スベキデアルト信ジ、茲ニ特ニ記載スル所デアアル。

何程ノ「ビタミン」Cヲ要スルヤ

各種「ビタミン」ハ夫々所要量が略々知ラレテ居ルガ尙決定的ニ至ラナイ。Cニ關シテ München ノ Schroeder (D. m. W. 1938) ハ1日ニ50 兪ヲ要スルトイツテ居ル。Stepp ノ方法ニヨツテ血液内ノ「アスコルビン」酸ノ含量ヲ定量シ、通常13 兪%デアルトイフ。毎日此者ニC 缺乏食物ヲ與ヘテオクト2週間ニシテ3 兪%ニ低下スルトイフコトデアアル他種類ノ「ビタミン」モCノ如クシ、比較的正確ニ定量シ得ルモノハ所要量ヲ決定シ易イト思フガ、却々ニソウ簡單ニハ實行出來ナイ。然シ夫等ノ中デモDハ定量出來ルノデハナイカト思ハレル。A、Bニ至ルト相當ニ困難デアラウガ、研究ノ歩ヲ此ノ方面ニ生化學的ニ進ムベキデアルト思フ。

斯ノ如キコトヲ考ヘテ居ルト同時ニ Gairdner (Br. m. J. 1938) ハ百日咳ノ小兒ニ年齢ニ顧慮セズ、第1週ハ毎日200 兪、第2週150 兪、第3週ハ100 兪用ヒテ経過ハ非常ニヨク、咳嗽發作ハ對照ヨリ一週間短ク終ツタトイフ報告ヲ見タ。Cハ相當多量ニ用ヒテモ害ハナイラシイ。

腸管細菌ニヨル「ビタミン」ノ生成

腸管其他人體ノ種々ノ部位ニハ、生理的ニ相當多數ノ細菌ヲ保育シテ居ルモノデアアル。其中、特ニ顯著ナルハ腸管デアリ、之レガ如何ナル生物學的意義アリヤニツイテハ古來、大ニ研究セラレ討議セラレツ、今日迄尙充分明ラカデナイ。然シ人體其他ノ動物ハ腸管ニ細菌ガナイト、充分ニ消化作用ガ行ハレナイトイフコトハ古ク Pasteur、Metschnikoff ノ言フ所デ、ソレハ正シイ。Nuttall & Thierfelder モ古ク、苦心シタ實驗ニヨツテ、8日間海狸ノ腸管ヲ無菌的状態ニシテ生存セシメ得タトイフ。アラユル植物ハ、土中ニ細菌類ガナイト發育シテ行カナイ。近時ノ醫學的研究ハ「ビタミン」トノ關係ニ向ケラレ、Bacillus bifidus ハ B₁ヲ生成スルカガアルト言フコトガ明ラカナツタ。A、D、B₂ノ如キモ出來ル可能性ガアルトイフ。Morell (D. m. W. 1938) ハCハ容易ニ腸管デ破壊セラレルガ、尙 Dehydrogenase ノ如キ酵素ノ働キト、何ラカ關係ガアリハセヌカト研究シテ居ル。余等モ、此方面ヘ研究ヲ向ケルト面白カラウト思フ。

十二、記録スベキ醫療器

「レントゲン」集光照射法、之ニヨル胃癌ノ治療成績

「レントゲン」線、「ラヂウム」線ノ照射ニヨツテ、婦人科的ノ癌腫、特ニ乳癌、子宮癌ノ如キハ驚クベキ計リ治療效果ヲ舉ゲ、其他外皮竝ニ之レニ近キ部位ニアル癌腫、肉腫ニ對シテモ、同様ノ成績ヲ舉ゲ得テ居ルコトハ今更申ス迄モナイ。然ルニ、男子

4. 類ノ動物實驗

{高木 逸磨君
福島 伴次君

傳染病研究所記念日

6月1日ハ本所ノ記念日ニ當リ、午前11時

カラ講堂テ次ノ様ニ式ガ行ハレタ。

1. 開式

1. 君ガ代 2 唱

1. 天皇陛下萬歳 3 唱

1. 物故職員追悼默禱

1. 所長式辭

1. 所歌合唱

1. 傳染病研究所萬歳 3 唱

1. 閉式

續イテ食堂ニ於テ祝宴ガハラレ。來賓トシテ長與前所長。石原東大醫學部長ノ興味深イ祝辭激勵ノ辭ガアツタ。

又此ノ記念日ノ行事トシテ本年ハ特ニ傳研公開ノ展覽會ヲ催シタノデ。午後1時カラ小ヤミモナク降りシキル大雨ニ拘ラズ1,000人近クノ熱心ナ一般參觀者ガアリ。頗ル盛大デアツタ。

學友會へ寄附

一金 39圓 6錢也 西尾 憲三君

一金 9圓 3錢也 城井 尚義君

一金 377圓 21錢也 眞鍋 清明君

人事異動報告

發令月日	辭令	官職	氏名
5. 1	中華民國へ出張ヲ命ス	技手	森下 哲夫
5. 6	研究生滿期退學(應召中)		濱口 廣成
5. 8	任東京高等齒科醫學校教授		
	敘高等官七等	技手	清水 文彦
5. 10	依願免本官	技手	柳 澤 謙
5. 12	任傳染病研究所技手		
	陸軍藥劑少尉正八位		山口 一考
5. 15	研究生退學許可		井上 幸助
5. 19	依願免本官	技手	高橋 義夫
5. 23	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		澤本 三郎
5. 25	任陸軍々醫少尉	技手	柳井 時正
5. 31	傳染病研究所業務ヲ囑託ス		柳 澤 謙
5. 31	研究生退學許可		藤森 正雄

宮澤政榮論文正誤表 (實驗醫學雜誌 23 卷 2 號ヨリ 5 號マテ)

號	編	頁	行	誤	正
2	1	191	上ヨリ 7	陰性	陽性
		..	上ヨリ 9	Zotozedtrum	Zytozentrum
		..	上ヨリ 10	網狀織内皮系統ト	網狀織内皮系統ノ
		..	上ヨリ 11	比較シ得々程少イ	比較シ得々程少イ
		「カルミレ」	「カルミン」
		..	上ヨリ 21	食喰	食喰
		195	上ヨリ 15	Locke-Bouillon-Dextroes	Locke-Bouillon-Dextrose
		213	上ヨリ 1	純織培養	純培養
4	3ノ(一)其	692	第 13 圖中 11 日目	c) 0(±)	d) 0(±)
5	3(其ノ二)	856	上ヨリ 10	10 ³ 稀釋液	10 ⁴ 倍稀釋液
		857	下ヨリ 7	デアル。 stoel	デアル Stoel
		..	下ヨリ 3	テルア。	デアル。
		865	下ヨリ 9	Gurnieri	Guarnieri
		866	下ヨリ 6	小型ノ Guanieri	小型ノ Guarnieri

雜 報

學友會へ寄附

一金 149圓 15錢也	藤本 三郎君
„ 10圓 60錢也	城井 尚義君
„ 103圓 18錢也	宮澤 政榮君

人事異動報告

發令 月日	辭 令	官職	氏 名
6. 10	任陸軍軍醫少尉	見習 醫官 (囑託)	增山 忠俊
6. 19	兼任厚生省防疫官 技高等官三等	教授	小島 三郎

雜 報

學術集談會

去ル7月13日(木)午後1時ヨリ學術集談會が催サレタ。ソノ演題ハ次ノ通り。

演 題

1. 「ヂフテリア」菌ノ多糖類分割
ニ就テ 中村 孝一君
2. 精製「ヂフテリア」明礬「トキシソイド」ニ就テ 永井 吉郎君
3. 「ツベルクリン」ノ成分ニ就テ
桑嶋 謙夫君
4. Convallamarin ノ結核菌發育
ニ及ボス影響ニ就テ(續報)

{東風 睦之君
長谷川秀治君

5. 肺炎雙球菌溶血毒素ニ就テ
(第三報) 新井三九雄君
6. 破傷風抗毒素血清製造ニ就テ

{川島 四郎君
利部光四郎君
横森 由仲君

7. 瓦斯壞疽豫防ニ關スル實驗的
研究 {小田 通男君
宮崎正之助君
井上 幸助君

8. 瓦斯壞疽豫防治療用血清ノ製
造ニ就テ {細谷 省吾君
小田 通男君
須藤 正君
井上 幸助君
安藤 正一君

9. 葡萄狀球菌抗毒性免疫ニ關ス
ル研究(續報) {細谷 省吾君
林 阿安君
松兼 正司君
鹽田 時夫君

10. 精製葡萄狀球菌「トキシソイド」
ノ臨牀的應用ニ就イテ(續報)

{鹽田 時夫君
細谷 省吾君
林 阿安君
松兼 正司君

11. 牛痘毒大量培養ノ可能性ニ就
イテ {矢追 秀武君
荒川 清二君

12. 精製痘苗。窒扶斯。虎列刺「ワ
クチン」三者ノ混合免疫ニ就イ
テ {矢追 秀武君
梶原 秀信君
留岡 展男君

13. 日本流行性腦炎ニ於ケル殺病
毒素價ノ季節的消長ト不顯性
感染トノ關係 {三田村篤志郎君
北岡 正見君
渡邊 漸君
天神 智君

宮川所長滿支へ出發

宮川所長ニハ今般滿洲國。中華民國ノ衛生
情況竝ビニ防疫事業視察ノ爲8月1日午後3
時多數ノ見送リヲ受ケテ東京驛ヲ出發セラレ
タ。9月17日頃歸京ノ豫定ノ由。

學友會へ寄附

- | | |
|-----------|--------|
| 一金7圓32錢也 | 八田 貞義君 |
| 一金20圓也 | 足達 虎雄君 |
| 一金85圓52錢也 | 高田 周平君 |

人事異動報告

發令 月日	辭	令	官職	氏名
7. 1		研究生入學許可		二神由紀彦
7. 1		中華民國へ出張ヲ命ズ	技手	阿部 康男
7. 6		滿洲國へ出張ヲ命ズ	囑託	大橋 久治
7. 8		滿洲國へ出張ヲ命ズ	教授	小島 三郎
7. 8		依願傳染病研究所業務囑託ヲ解ク		中村 道夫
7. 11		研究生滿期退學(應召中)		福山 榮三

雑 報

菅原・松兼兩君應召サル

菅原芝郎君ハ 10月20日、松兼正司君ハ 11月1日、夫々名譽ノ召集ヲ受ケ、勇躍應召サレタ。

學術集談會

10月26日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ、演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 消毒藥加石鹼ノ殺菌效果ニ就テ
安倍 胤一君
2. 「ツベルクリン」ノ精製ニ就テ
桑島 謙夫君
3. 精製破傷風明礬「トキソイド」ニ就テ
{永井 吉郎君
佐伯 潔君
4. 赤痢「ワクチン」ノ研究
第一報、志賀菌「フォルマリン」・明礬「ワクチン」ニ就テ 村江 通之君
5. 流行性腦炎「ウィールス」ノ「ガラス」器内培養(第二回報告)
主トシテ「ウィールス」ノ「ガラス」器内ニ於ケル消長ニ就テ 川喜田愛郎君
6. 「マラリア」媒介蚊ニ關スル實驗的研究
{石井信太郎君
鈴木 一男君
7. 「カラ・アザール」(黑熱病)ニ關スル研究(第四報)
原蟲傳播ト蠅トノ關係ニ就テ
{石井信太郎君
鈴木 一男君
8. 葡萄狀球菌ニ因スル食物中毒

(綜説)

9. 癌血清酸濁反應ニ就テ 小島 三郎君
今村 荒男君

學友會へ寄附

- | | |
|-------------|------------------|
| 一金 6圓 20錢 | 永井 吉郎君 |
| 一金 33圓 27錢 | 川喜田愛郎君 |
| 一金 40圓 14錢 | 石井信太郎君 |
| 一金 13圓 22錢 | 崔 在 緯君 |
| 一金 6圓 20錢 | 桑島 謙夫君 |
| 一金 157圓 57錢 | 藤森 正雄君 |
| 一金 409圓 60錢 | 門脇 良徳君 |
| 一金 12圓 0錢 | 川島 四郎君 |
| 一金 98圓 46錢 | 下田 亮君 |
| 一金 179圓 44錢 | 新家 借三君 |
| 一金 13圓 13錢 | {大竹 巖君
酒井 臯二君 |
| 一金 41圓 70錢 | 細谷 省吾君 |
| 一金 21圓 20錢 | 安藤 誠治君 |

人事異動報告

昭 14. 11. 2 現在

- | 發令月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|--------|-----------------|-----|--------|
| 10. 2 | 中華民國へ出張ヲ命ス | 助教授 | 羽里彦左衛門 |
| 10. 10 | 依願傳染病研究所業務囑託ヲ解ク | | 松本 虎太郎 |
| | 同 上 | | 峰岸 重知 |
| | 同 上 | | 村田 良介 |
| 10. 12 | 臺灣へ出張ヲ命ス | 技師 | 遠山 祐三 |

レル脊髄液中ニ存在スルヤウ 處置スル必要ガアル。之ガ爲ニハ化學製劑ノ脊髄液ヘノ移行性が實際的ニハ必要デアリ 腦膜炎治療ニハ充分ナ價值ヲ有スル。此化學治療劑群ノ代表者ハ「ズルファニイルアミド」テ此ノ製劑ノ作用ハ直接テハナクテ、身體ノ殺菌作用ガ刺戟サレルノカ或ヒハ細菌ノ發育ニ對シ環境ノ増悪ガ起ルノカハ兎モ角トシテ一種ノ身體作用ト「ズルファアミド」ノ分解デアル。從テ腦膜炎療法ニハ脊髄液ト血液中ニ於ケル濃度ノミガ問題デハナク、臨牀的ニ觀察サレタ 化學製劑ノ作用力ト一致シタ時ニノミ意味ガアル。此意味テ著者ハ各種ノ「ズルファニイルアミド」製

劑ノ脊髄液ヘノ移行性ヲ實驗シ次ノ結果ヲ得タ。「ズルファピリテン、オイバシウム」ノ腦膜炎患者脊髄液ヘノ移行性ハ良好デアルガ之ニ反シ「ウリロン」ノソレハ甚ダ惡イ。臨牀的ニ治療成績モ亦之ニ一致スル。麻痺性痴呆症ヤ動脈硬化症患者ニ於ケル白色「プロントシル」ノ脊髄液移行性モ良好デアルカ之ニ反シテ可溶性ノ「ヘキソーゼ、ズルファアミド」及「オイバシウム」ノ「ナトリウム」鹽ノソレハ甚ダ惡イ。而シテ是等製劑ノ脊髄液ヘノ透過力ニ關シテ一定ノ法則ガアルカ否カハ未ダ不明デアル。
(市川)

報 雜

宮川所長歸朝サル

去ル8月始メ同仁會副會長トシテ滿洲、北中支方面ノ衛生防疫視察ノタメ 旅行中ダツタ所長ハ9月18日東京驛着元氣テ歸京サレタ。

栗林君應召サル

9月22日栗林久之輔君ハ名譽ノ召集ヲ受ケ、欣然入隊サレタ。

羽里所員渡支サル

羽里彦左衛門助教授ハ現職ノマ、北京ノ同仁會華北中央防疫處ニ勤務スルタメ9月26日東京驛ヲ出發サレタ。

學術集談會

9月21日(木)午後1時カラ本所講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ、ソノ演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 微毒ノ生體抵抗力ニ及ボス影響
藤森 正雄君
2. 「ズルホンアミド」製劑ノ實驗的効果
〔土屋 三司君
福見 秀雄君〕
3. 色素產生能ヲ有スル「コレラ」

菌株ニ就テ

〔岡本 啓君
久津見 專君〕

4. 「シュワルツマン」現象ニ於ケル毒性物質ノ研究 菅原 芝郎君
5. 各種結核菌ノ「ツベルクリン」反應並ニ抗原抗体反應ニ就テ 磯 俊六君
6. 精製「ヂフテリヤ」明礬「トキソイド」ニ就テ(第二報) 永井 吉郎君
7. 皮下種痘ニ於ケル硬結ノ意義闡明ニ關スル家兎實驗 〔矢追 秀武君
荒川 清二君〕
8. 葡萄狀球菌ニ因ル食中毒 〔小島 三郎君
入田 貞義君
大橋 又治君〕

人事異動報告

- | 發令月日 | 辭 令 | 職 氏 名 |
|-------|---------------------|---------|
| 9. 12 | 任陸軍軍醫少尉
見習醫官(技手) | 朝倉 貫一 |
| 9. 18 | 傳染病研究所業務ヲ囑託ス | 柳澤 睦夫 |
| 9. 22 | 應召(仙臺輜重兵第二聯隊ヘ) | 雇 栗林久之輔 |
| 9. 26 | 任公衆衛生院助教授
囑託 | 柳澤 謙 |
- 叙高等官六等

報 雑

菅原・松兼兩君應召サル

菅原芝郎君ハ10月20日、松兼正司君ハ11月1日、夫々名譽ノ召集ヲ受ケ、勇躍應召サレタ。

學術集談會

10月26日(木)午後1時カラ講堂ニ於テ學術集談會ガ催サレ、演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 消毒薬加石鹼ノ殺菌效果ニ就テ
安倍 胤一君
2. 「ツベルクリン」ノ精製ニ就テ
桑島 謙夫君
3. 精製破傷風明礬「トキノイド」ニ就テ
{永井 吉郎君
佐伯 潔君
4. 赤痢「ワクチン」ノ研究
第一報、志賀菌「フォルマリン」・明礬「ワクチン」ニ就テ 村江 通之君
5. 流行性腦炎「ウィールス」ノ「ガラス」器内培養(第二回報告)
主トシテ「ウィールス」ノ「ガラス」器内ニ於ケル消長ニ就テ 川喜田愛郎君
6. 「マラリア」媒介蚊ニ關スル實驗的研究
{石井信太郎君
鈴木 一男君
7. 「カラ・アザール」(黑熱病)ニ關スル研究(第四報)
原蟲傳播ト蠅トノ關係ニ就テ
{石井信太郎君
鈴木 一男君
8. 葡萄狀球菌ニ因スル食物中毒

(綜説)

9. 癌血清酸濁反應ニ就テ 小島 三郎君
今村 荒男君

學友會へ寄附

- | | |
|-------------|---------|
| 一金 6圓 20錢 | 永井 吉郎君 |
| 一金 33圓 27錢 | 川喜田愛郎君 |
| 一金 40圓 14錢 | 石井信太郎君 |
| 一金 13圓 22錢 | 崔 在 緯君 |
| 一金 6圓 20錢 | 桑島 謙夫君 |
| 一金 157圓 57錢 | 藤森 正雄君 |
| 一金 409圓 60錢 | 門脇 良徳君 |
| 一金 12圓 0錢 | 川島 四郎君 |
| 一金 98圓 46錢 | 下田 亮君 |
| 一金 179圓 44錢 | 新家 借三君 |
| 一金 13圓 13錢 | {大竹 巖君 |
| 一金 41圓 70錢 | {酒井 臯二君 |
| 一金 21圓 20錢 | 細谷 省吾君 |
| | 安藤 誠治君 |

人事異動報告

昭14. 11. 2 現在

- | 發令月日 | 辭 令 | 官職 | 氏 名 |
|--------|-----------------|-----|--------|
| 10. 2 | 中華民國へ出張ヲ命ス | | |
| | | 助教授 | 羽里彦左衛門 |
| 10. 10 | 依願傳染病研究所業務囑託ヲ解ク | | |
| | | | 松本 虎太郎 |
| | 同 上 | | 峰岸 重知 |
| | 同 上 | | 村田 良介 |
| 10. 12 | 臺灣へ出張ヲ命ス | | |
| | | 技師 | 遠山 祐三 |

実験医学雑誌 23巻 p1835-1836 1939年
(12号)

雜

報

西下・飛田兩君凱旋

醫局ノ西下止夫君。事務ノ飛田義雄君ハ赫々タル武勳ヲタテ、凱旋サレ。夫々11月1日・11月23日ニ日出度召集ヲ解除サレテ歸所サレタ。

石井所員渡米

石井信太郎助教授ハ今回米國「ロックフェラー」財團ノ「フェローシップ」トシテ招聘サレ。去月30日午後3時横濱出帆ノ鎌倉丸ニテ渡米ノ途ニツカレタ。

學術集談會

去ル30日(木)午後1時ヨリ構堂ニ於テ學術集談會ガ開催サレ。演題ハ次ノ様デアツタ。

1. 精製破傷風明礬「トキシイド」ニ就テ
 { 永井 吉郎君
 川島 四郎君
2. 滿州青少年義勇隊訓練所ノ夏季衛生。殊ニ赤痢腸炎ニ就テ
 { 大橋 久治君
 小島 三郎君
 伊藤 四郎君
 大 岡 卓君
3. 余等ノ研究ニ對スル Ackermann 教授ノ追試報告ニ就テ 中村 敬三君
4. 「アナフィラキシー」ニ關スル我教室其後ノ知見 中村 敬三君

5. 生體內ニ於ケル蛇毒ノ不活性化

ニ就テ(第1報)

{ 長谷川 秀治君
東風 睦之君
竹内 孝雄君

6. Boström 型放射狀菌ノ變異性ニ

就テ(第1報)

{ 長谷川 秀治君
東風 睦之君
武井 盈君

學友會へ寄附

一金 22圓 59錢也

矢追 秀武君

一金 34圓 41錢也

細谷 省吾君

人事異動報告

昭和 14. 12. 2 現在

發令月日	辭	令	官職	氏名
11. 1	召集解除		軍醫中尉(技手)	西下 止夫
11. 13	研究生入學許可			天野 正章
	同上			朽木 武營
11. 15	寄生蟲學研究ノ爲滿1年間亞米利加合衆國ニ在留ヲ命ス		助教授	石井信太郎
11. 23	召集解除		書記	飛田 義雄
11. 24	研究生退學(研究事項完了ノ爲)		警視廳委託研究生	吉水元三郎
11. 30	研究生退學許可			竹内 孝雄
12. 1	研究生入學許可			久保田 久

